

## 「修養科」はなぜ「修養」科なのか —「心田」の考察—

修養科はなぜ「修養」科なのか。こんなことを考えたことはありませんか。多分ないでしょう。考える以前の問題として頭に刷り込まれているからでしょう。ただ、考えると大変面白い。日本の近代民衆史を背負っているような言葉だからです。「修養」を辞書でひくと、一徳性をみがき、人格を高めることとあり、明治30年代からよく使われるようになったらしい。また、修養と同じような意味で、その頃から使われるようになった言葉に「心田」があります。これは「心田開発」「心田を耕す」といった形で、現在も政治家や実業家の文の中に出てきます。この「心田」は、天理教文献にも出てきます。明治39年に書かれた『御神楽歌述義全』の七下り目解説部分に14例あります。

「修養」をテーマにした本に『「修養」の日本近代』があります。この本の冒頭は、「松下幸之助をどう捉えるか」という小見出しで始まっています。幸之助は天理教と大変縁が深い。松下電器(ナショナルー現パナソニック)の創業記念日は昭和7年5月5日で、これは同年3月のある日、幸之助が天理教会本部を訪問したことに由来しています。今回は「修養」「心田」を天理教から考えてみました。

(※松下)幸之助は何か一つの宗教を篤く信仰することはなく、特定の宗教を深く学んだわけでもなかった。むしろ、ことばの正確な意味での宗教者でもない。多様なかたちで宗教と関わる一方で、特定の宗教に深入りはせず、人間一般、とりわけ働く人々の生き方の理想を説き、企業という集団を導いた。そうした彼のような存在を、一体どう捉えたらよいのだろうか。

### 近代日本初の自己啓発書

手がかりとなるのが、「修養」という考え方だ。宗教と付かず離れずの関係を保ちながら、自分を磨き、高めようと努力する人々の営みは、この修養の思想や実践を通して、明治以降の日本社会のなかで連綿と続いてきた。修養とは、主体的に自己の品性を養ったり精神力を鍛えたりすることで、人格向上に努める思考や行為をさす。自分の努力によって能動的に自己のより良い状態を目指そうとする「自分磨き」の志向と言ってもよい。修養という用語自体はそれ以前からあったが、あるべき自己を目指して努力するとの意味を持つ近代的なことばとして、明治になってから生まれ変わり、普及した。以後、「自分をいかに磨き、高めるか」は、日本人の心をつかんで離さない一大テーマとなっていく。(『「修養」の日本近代』P11. 大澤絢子. 2022. NHK出版)

**修養科** 修養科は、「親里ちば」で、親神の教えを学ぶとともに、心の修養に励み信仰の喜びを体得するための信者の修養道場である。その修養期間は3ヵ月で、その間に「別席」の話を9回聴いて、「おさづけの理」(→さづけ)を拝戴し、親神の望まれる「陽気ぐらし」の世界を建設する「よふぼく」(ようぼく)へと生まれかわり、新しい人生の門出をすることがその目的である。修養科では、満17歳以上で、信仰を求める人であれば、誰でも修養することができる。／ 修養科は昭和16年(1941)4月に開設された。当初は、天理教教師の養成を目的とした天理教校内に設けられたが、昭和28年、修養科は教会本部に移管され、現在は、内統領所管にあって、「天理教教会本部修養科」と称している。(『天理教事典第三版』P432)

明治30年代に「修養」ということが語られ始めます。なぜこの時代に語られ始められたのか、親の職業を継がざるを得なかった江戸時代から、自由に選べるようになった明治時代ということが基本にあると思いますが、深入りするのはいりません。

3 修養主義者・運動の登場 —中略—

一、清沢満之の雑誌『精神界』の創刊（明治34年）／ 前年から清沢は暁烏敏らと東京本郷に「浩々洞」という拠点を設けて浄土真宗系の「精神主義」運動を開始していた。その成果が目に見える形で表われたのが『精神界』であった。清沢の主張の基本は次のようなものであった。／「各個人の道徳進歩は、天稟(てんぴん)と修養とによりて差等あるなり。天稟に属するものは、吾人の如何ともし能わざる所なり。吾人の最も要とすべきは修養のことに属す。修養は人生の第一義たるものなり。—中略—

二、綱島梁川の「見神の実験」（明治37年）／ 綱島は最初キリスト教の洗礼を受けた人だが、後「懐疑、煩悶、自省、迷悟」の果てに、『白隠全集』を耽読するなどの遍歴を経て、この年三度「無限の深き寂しさの底いより堂々と現前せる大いなる靈的活物とはたと行き会いたるようの一種のshocking錯愕、驚喜の意識」「今まで現実の我れとして筆執りつつありし我れが、はっと思う刹那に、忽ち天地の奥なる実在と化(かわ)りたるの意識」を体験した。／ 彼はこの体験から、人生の悲哀を感じた人は「悲哀そのものを通じて、悲哀以上の或るものを獲来たるなり」。悲哀こそが神・宗教への第一歩であると説いた。／ そして「かの小児の弄ぶなる不倒翁というものの態度こそ、おもしろく、ゆかしけれ。彼れ百倒百起して、曾て著意艱難の色あるなし。彼れの起きるは起きんとして起きるにあらずして、起きざるを得ずして起きるなり。其の硜硜(こうこう)として自ら頼むの態なきは、更に大いに頼む所あればなり」という「没修養の修養」などを講じた。

三、西田天香の「一燈園」設立（明治38年）／ この年、トルストイの『我が宗教』に啓発され無一物となって郷里長浜の神社境内の愛染堂で断食をしていた西田は、四目目の朝、乳を求める嬰兒の声に「生存競争ではない、闘いではない、他をしのぐのではない」人生の有り方を「悟った」。彼は「菩提心」と「光明」に養われた「托鉢」と「奉仕」と「懺悔」の生活に入り、一燈園を設立する。／ 彼が園の人に説いた心構えは「「どうしたら自分が都合よくなるか」と思うてでなくて、「どういう風にして自分を捨てるのか」ということを、修養しに来るつもりであってほしい」ということであった。「下坐」＝「一番下に居る」の「修養」により「今の世界にいっぱいになってある（中略）優越欲」＝「他にまさりたいという思い」を「整理する」ことを説いたのであった。—中略—

四、蓮沼門三の「修養団」の設立（明治39年）／ 明治36年東京府師範学校に入学した蓮沼は寄宿舎の不潔に驚き、清掃美化運動を始めたが同調者なくむしろ妨害にあった。しかし、明治38年「寒中雑巾かけに手の甲から血潮がしたたる。それを目撃した同室の一人が深く感動し、門三の運動に協力。以後、同志次々に現われる」こととなった。／ 「一人の力は弱くても、この一人が善い事にむかって真剣に努力を継続する時、少なくとも一人の魂を動かして共鳴者を生むことができる。すなわち一人は二人となる。そして二魂が動けば三魂、四魂を生み、やがては万魂を動かすに至り、かならずや明るい世界を実現できる」という「確信」を抱いた蓮沼は、明治39年山室軍平や松村介石の影響下、神道・キリスト教・仏教を融合した修養団を設立した。／ 修養団の「目的」には「自己の修養につとめ、人格の向上をはか」ること、団員の「信仰」には「人生の目的は人格の向上にあり」が掲げられていた。（『日本型「教養」の運命』P7. 筒井清忠. 岩波書店. 1995）

明治42年の『修養論』は「心田を耕耘して其の収穫を得る」と記す  
 「修養」＝「心田を耕作」

「修養」を論じる本の中に明治42年出版の『修養論』があります。この本は修養を「心田を耕耘して其の収穫を得る」とことと説明しています。「心田」は小さな辞書には出ていないような言葉ですが、『日本国語大辞典』には「心を田地にたとえた語」とあります。  
 この心田は、今も「心田開発」「心田を耕す」などとして使われています。

松村の『修養録』と並んで人気を博したのが、加藤咄堂の『修養論』だ。彼は仏教学者として曹洞宗大学（現在の駒澤大学）や東洋大学で教鞭をとったが、僧侶ではない。同書で彼は、修養を英語のカルチャー（culture）にあてはめ、「心田を耕作」すること、またはその「収穫」を修養と位置づけている。彼の説く修養の目的は、「人格の完成」「品性の陶冶」「身体の剛健」「智能の啓発」「趣味の涵養」「意志の鍛錬」にあり、内面だけでなく、身体面での向上にも目が向けられていた。心と身体両方の修養である。修養をドイツ語のビルズング（bildung）にもあてはめた彼は、「人物を作為し品性を模造する」行為として、精神だけでなく、身体も修練することの必要性を訴え、修養の方法として坐禅も取り上げている。ここでの坐禅は、悟りを目指して僧侶が行う禅の修行としてではなく、日常で実践するものであった。（『「修養」の日本近代』P42. 大澤絢子. 2022. NHK出版）



修養の語義多端、之を用ふる人々一ならず、暫く其の普通の意を解せんか  
 英語之をカルチュア (Culture) といひ耕作の義なりと、心田を耕耘して其の收  
 穫を得るの義か、獨語之をビルズング (Bildung) といひ作為構造の義なりと、  
 人物を作為し品性を模造するの義と解すべきか。諸葛孔明に靜以て身を修め、  
 儉以て徳を養ふの語ありて此の二字を明かすに適す、修養の語本來の意は暫  
 く此の如しとするも、新時代の新修養は又新意味を以て解せざるを得ず。吾  
 人は僅かに靜以て身を修め、儉以て徳を養ふのみを以て足れりとせず、進ん  
 で動以て世に處し、勤以て道を行はしめんとす。此の故に吾人の謂ふ所の修  
 養には靜の外に動あり、儉の外に勤あり、殊に其の修養する所、人格全般に  
 亘るが故に、唯だ其の目的とする所心田耕耘の一面に存せずして別に身體訓  
 練の一面あり。蓋し精神と身體とは共に全圓の内外にして、内より見れば圓  
 の如く、外より見れば凸の如しと雖も、それは觀る者の立脚を同うせざるにし  
 て、圓其の者の二あるにあらず、主觀的に之れを心と呼び、客觀的に之れを  
 身と名く、身心もと二元にあらず、精神は身體に影響し、身體は精神に影響  
 三

## 「心田開発」—意識改革による自立自助を促す

著者の松沢成文氏は慶応大学卒業後、松下政経塾で学び、衆議院議員(3期—民主党)、神奈川県知事(2期)をつとめ、現在は日本維新の会所属の参議院議員(3期目)です。ここでは「心田開発」という言葉で、「意識改革による自立自助を促す」ことが語られています。「自助、共助、公助」の中の「自助」です。

### 「心田開発」—意識改革による自立自助を促す

尊徳が行なった仕法は、決してはじめから万人に受け入れられたわけでない。紹介してきたとおり、地域住民からの反発や妨害工作も少なくなかった。／ たしかに尊徳は類い稀なる技術や知識をもち、人徳と実行力を兼ね備えていたが、どんなに復興したかのように見えても、地域住民一人ひとりの協力がなくては、その状態は維持できない。また、第二章でも述べたとおり、尊徳は自発的な改革を促し、農民の自立を最重要視していた。補助金に頼らず分度を立てることの重要性を徹底して教えた。改革に特効薬などはなく、真の復興のためには、根気よく地域住民の心を育てていくしか道はないのだ。／ 『報徳記』には、繰り返し「村民を撫育する」という言葉が出てくる。村民の意識改革による自立自助を促すため、村民を撫で育て導いたのである。

尊徳が「芋こじ」と呼ばれる寄合いを重視したことは前にも述べた。仕法の進め方、復興資金の使い道、村人のなかから選出する表彰者、村方三役の決定などの課題に対して、寄合いの場で意見と意見をぶつけあい、不満やいさかいなどを洗い流し、コンセンサスをめざすのだ。場合によっては投票で決することもあった。／ こうして芋こじに参加することにより、村人は復興事業を他人事ではなく、当事者として責任感をもって臨むようになる。村人は共同体的な結束を固め、生産力を増していった。／ 尊徳はこのようにして、村人一人ひとりの我欲を制し、ヤル気を引き出し、人々の意識を変え、自立への基盤を育成していったのだ。

「私の本願は、人々の心の田の荒蕪(雑草が生い茂る荒れた土地)を開拓して、天から授かった善い種、すなわち仁義礼智というものを培養して、この善種を収穫して、又まき返しまき返して、国家に善種をまきひろめることにあるのだ。(中略)／ そもそもわが道は、人々の心の荒蕪をひらくのを本意とする。一人の心の荒蕪が開けたならば、土地の荒蕪は何万町歩あろうと心配することはないからだ。そなたの村(相州金目村片岡、現・神奈川県平塚市内)のごときは、そなたの兄(福住正兄の兄、大沢小才太)一人の心の開拓ができただけで、一村がすみやかに一新したではないか。大学に、『明德を明らかにするにあり、民を親(あら)たにするにあり、至善に止まるにあり』とある。明德を明らかにするとは心の開拓をいうのだ。そなたの兄の明德が少しばかり明らかになったら、すぐに一村の人民が新たになった」(「夜話」六八)

尊徳は、こうして荒地だけでなく、人々の心を開拓していった。／ 報徳仕法にあって、荒地開発が自然界に対する人間の働きかけであり、一方、心田開発は人間の内にある私欲への働きかけである。私欲を制して推譲を実践し、依存を制して自立することこそが、徳を積み徳に報いる人道の基本なのである。(『教養として知っておきたい二宮尊徳』P120. 松沢成文. PHP新書. 2016)

株ドットコム of 創業者でSBIホールディングスの会長兼社長である北尾吉孝氏は「心田」をお釈迦様の言葉に端を発しているように書いています。また、二宮尊徳の言葉として理解していたとも書いています。政治家や実業家の中では、「心田」は現在も使われ生きているのです。

## 心田を耕す～善の種を収穫して蒔き広める～北尾吉孝～(アゴラ - 言論プラットフォーム)023.04.06

株式会社財界研究所より『心田を耕す』という本を上梓しました。本書は「北尾吉孝日記」を再構成したもので、08年9月出版の第1巻『時局を洞察する』から数えて15巻目に当たります。／本書のタイトルを色々と考えた末、『心田を耕す』としました。その理由の一つは、本書を構成する多くのブログの主張は畢竟（ひっきょう）、心田を耕すということに帰着すると思ったからです。もう一つの理由は二宮尊徳（金次郎）について、もっと多くの人に知ってもらいたいと思ったからです。

この「心田を耕す」は、お釈迦様の言葉に端を発しているようです。お釈迦様が托鉢（たくはつ）をしている時に、お百姓さんから「私は田畑を耕し、種を蒔いて食を得ている。あなたも人に施しを乞うのではなく、自分で田畑を耕し、種を蒔いて食を得たらどうですか」と言われ、「我は忍辱（にんにく）という牛と、精進という鋤（すき）をもって、一切の人々の、心の田畑を耕し、真実の幸福になる種を蒔いている」と答えられたと伝えられています。

私は、この言葉は長年、二宮尊徳翁のものだと思っていました。彼の言で「私の本願は、人々の心の田の荒廃を開拓していくことである。天から授けられた善の種である仁義礼智を栽培し、善の種を収穫して、各地に蒔き返して、日本全体にその善の種を蒔き広めることである」というものがあつたからです。

上記は、当に尊徳翁の報徳思想の根幹を為すものだと私は考えています。尊徳翁の思想は神道・儒教・仏教のエッセンスを取り出し、翁の体験的・実践的知恵と結合・折衷させて生み出したものです。尊徳翁は、この思想の四つの実践倫理（至誠、勤労、分度、推譲）を貫き、武家や藩家の財政を立て直したり、村の農業を復興させ、最終的には約六百の村おこしを行ったと言われています。これら四つの実践倫理の内、「分度」とは分に従って度を立てることで、自分の置かれた状況や立場を弁（わきま）え、それぞれに相応しい生活をする事。また、収入に応じた一定の基準（分度）を決めて、その範囲内で生活をする事。「推譲」とは将来に向けて、生活の中で余ったお金を家族や子孫のために貯めておくこと（自譲）。また他人や社会のために譲ること（他譲）を言います。

北尾吉孝－実業家。SBIホールディングス代表取締役会長兼社長兼CEOで、SBIインベストメント代表取締役執行役員会長兼社長。21年間「野村證券」に勤務。SBIホールディングス－日本の金融持株会社。ネット証券最大手のSBI証券（オンライン証券会社）を中心に、証券業、銀行業、オンライン銀行業、暗号資産、ヘルスケアなど多数の事業と子会社を傘下に抱える金融コングロマリット[2]であるSBIグループを形成している。

ここに示す本願寺派のHPでは、「心の田を耕す」となっています。仏教のHPなので当然ですが、二宮尊徳は出てきません。仏典の「スッタニパータ」に出ているとあります。

・例話の紹介 / (4) **心の田を耕す** (浄土真宗本願寺派総合研究所HPより)

・釈尊がある村で托鉢をしている時、バーラドヴァージャというバラモンが収穫した食物を配っているところに出会いました。釈尊が食を受けるため、その傍らに立たれると、バーラドヴァージャは釈尊に言います。「わたしは今、こうして田を耕して種をまいている。田を耕して種をまいたあとで食べるのです。あなたも同じように田を耕し種をまいたあとで食べなさい」。

釈尊は答えます。「私もまた田を耕し種をまいています。耕して種をまいてから食べるのです」。

しかし男からすればどう見ても釈尊は田を耕しているようには見えません。そこで男はふたたび釈尊にたずねます。「田を耕す道具もなく、牛もないのに、どうやって田を耕しているというのですか。私に分かるように話してください」。

釈尊は答えました。 / 私にとっては、信仰が種である。 / 苦行が雨である。 / 智慧がわが軛(くびき)と鋤(すき)とである。 / 慚(はじること)が鋤棒である。 / 心が縛る縄である。 / 気を落ち着けることがわが鋤先と突棒とである。 / わたしは真実をまもることを草刈りとしている。 / 努力がわが牛であり、安穩の境地に運んでくれる。 / 退くことなく進み、そこに至ったならば、憂えることがない。 / この耕作はこのようになされ、甘露の果実をもたらす。 / この耕作が終わったならば、あらゆる苦悩から解き放たれる。 / その時、バーラドヴァージャは釈尊に言いました。「釈尊、あなたは耕作者です。釈尊は甘露の果実(みのり)をもたらす耕作をなさるのでありますから」。

毎日の忙しさのなかで、心が固く冷たい土のようになってはいないでしょうか。釈尊の言われる「田を耕す」とは「心の田を耕す」ことであると言えます。それは私たちにとっては、自らを掘り返して仏法を聞いていくことであり、仏さまの光に照らされながら柔らかで温かな心を養っていくことであると味わうことができます。

【解説】毎日の仕事や家事は私たちが生きていくために必要なことです。その代表として「田を耕す」ことが挙げられています。しかし、物質的に豊かな生活をするだけで人生のすべてではありません。ここでは「田を耕す」ことになぞらえて、あらゆる苦悩を離れたさとりの世界(甘露の果実)を得るための道を歩むことの大切さが説かれています。

・【補足】この話はパーリ語で書かれた『スッタニパータ』や『サンユッタニカーヤ』に収載されています。『スッタニパータ』は中村元訳『ブッダのことば』(岩波文庫、23～27頁)に「田を耕すバーラドヴァージャ」として日本語訳されています。『サンユッタニカーヤ』の日本語訳は『南伝大蔵経』第12巻(294～297頁)にあります。

これは本願寺派HPの例話で出典とされている「スッタニパータ」です。ここには「心田」も「心の田」もありません。ブッダの言葉としては「耕して種を播く」しかありません。松沢成文氏や北尾吉孝氏の「心田開発」や「心田を耕す」の意味がこの仏典が記すことと同じなのか、検討を要するように思います。

#### 四、田を耕すバーラドヴァージヤ

わたくしが聞いたところによると、—あるとき尊き師（ブッダ）はマガダ国の南山にある「一つの茅」というバラモン村におられた。そのとき田を耕す、バラモン・バーラドヴァージヤは、種子を播く時に五百挺の鋤を牛に結びつけた。

そのとき師（ブッダ）は朝早く內衣を着け、鉢と上衣とをたずさえて、田を耕す、バラモン・バーラドヴァージヤが仕事をしているところへ赴かれた。ところでそのときに田を耕すバラモン・バーラドヴァージヤは食物を配給していた。

そこで師は食物を配給しているところに近づいて、傍らに立たれた。田を耕すバラモン・バーラドヴァージヤは、師が食を受けるために立っているのを見た。そこで師に告げていった、／ 「道の人よ。わたしは耕して種を播く。耕して種を播いたあとで食う。あなたもまた耕せ、また種を播け。耕して種を播いたあとで食え」と。

（師は答えた）、「バラモンよ。わたくしもまた耕して種を播く。耕して種を播いてから食う」

（バラモンがいった）、「しかしわれらは、ゴータマさん（ブッダ）の軛（くびき）も鋤も鋤先も突棒も牛も見ない。それなのにゴータマさんは『バラモンよ。わたしもまた耕して種を播く。耕して種を播いてから食う』という」と。

そこで田を耕すバラモン・バーラドヴァージヤは詩を以て師に呼びかけた。

七六「あなたは農夫であるとみずから称しておられますが、われらはあなたが耕作するのを見たことがない。おたずねします、—あなたが耕作するということを、われらが了解し得るように話してください。」

七七（師は答えた）、「わたしにとっては、信仰が種子である。苦行が雨である。智慧がわが軛と鋤とである。慚（はじること）が鋤棒である。心が縛る縄である。気を落ちつけることがわが鋤先と突棒とである。」

七八 身をつつしみ、ことばをつつしみ、食物を節して過食しない。わたくしは真実をまもることを草刈りとしている。柔和がわたくしにとって〔牛の〕軛を離すことである。

七九 努力がわが（軛をかけた牛）であり、安穩の境地に運んでくれる。退くことなく進み、そこに至ったならば、憂えることがない。

八〇 この耕作はこのようになされ、甘露の果実をもたらす。この耕作を行なったならば、あらゆる苦悩から解き放たれる。」

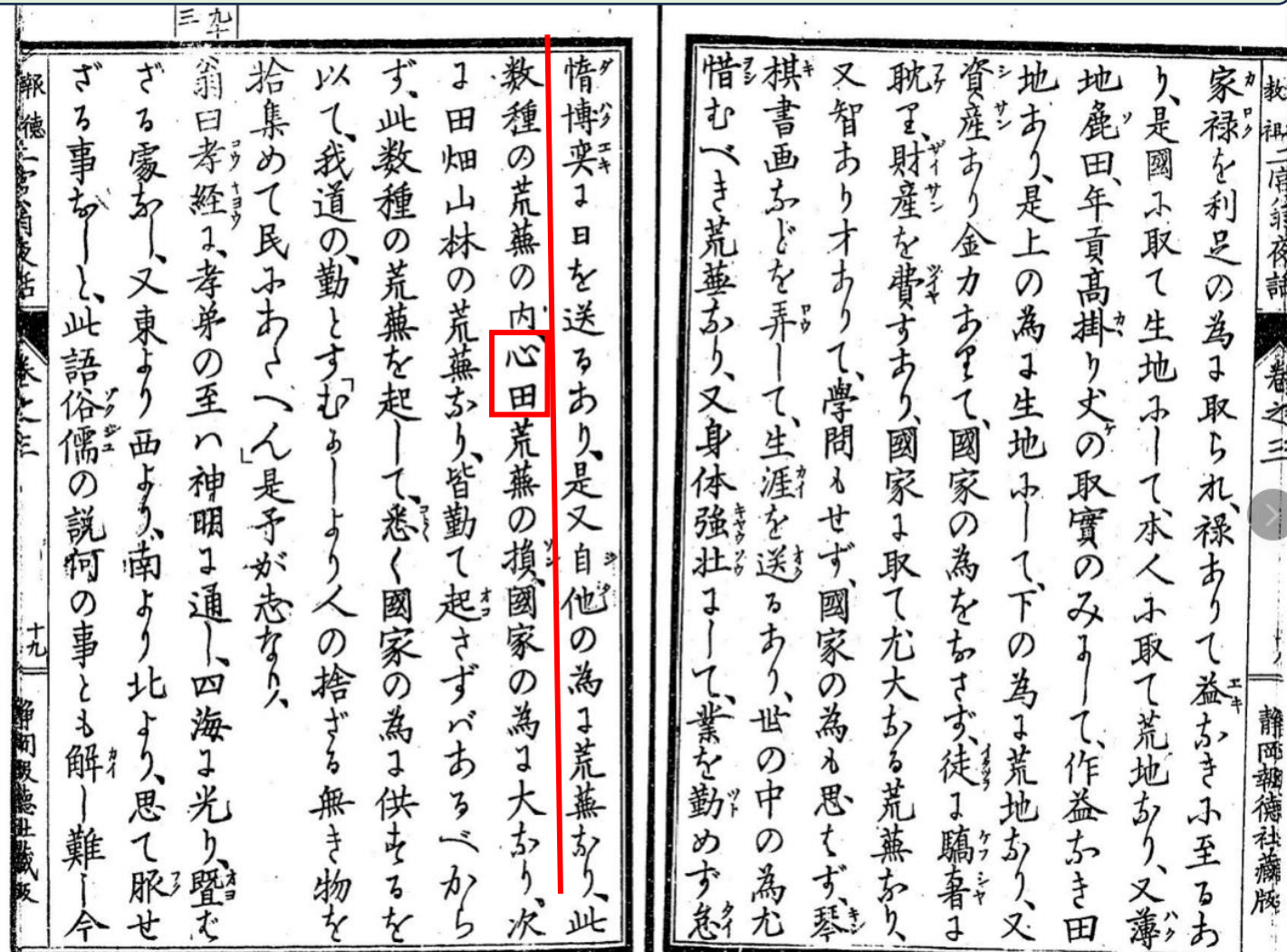
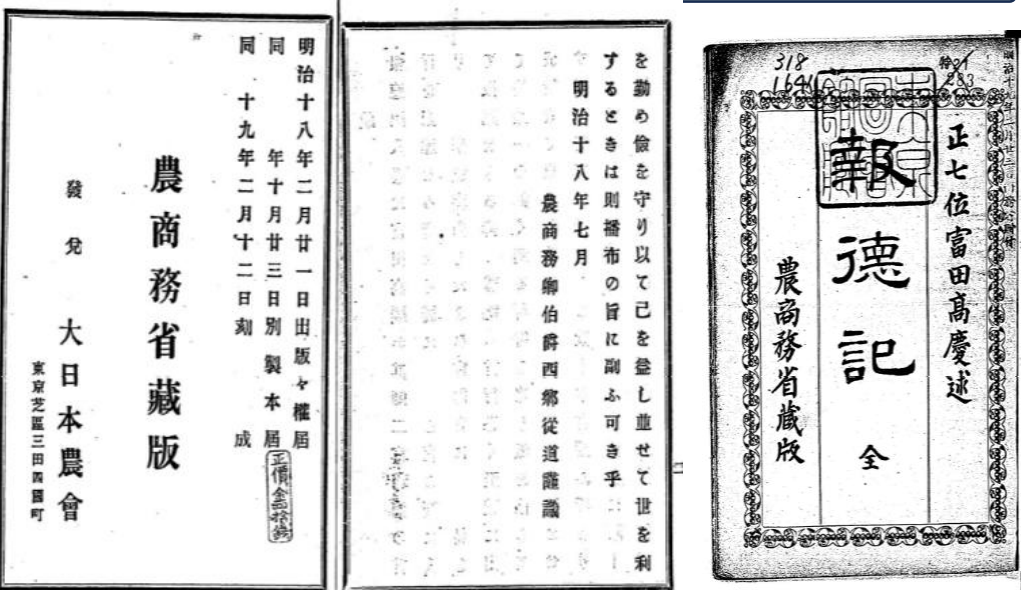
そのとき田を耕すバラモン・バーラドヴァージヤは、大きな青銅の鉢に乳粥を盛って、師（ブッダ）にささげた。—「ゴータマさまは乳粥をめしあがれ。あなたは耕作者です。ゴータマさまは甘露の果実をもたらす耕作をなさるのですから。」（『ブッダの言葉—スッタニパータ』P23. 岩波文庫. 中村元訳. 1984）

一尊徳は「心田」を語ったかー

「心田」は『二宮翁夜話』にある一か所だけ『報徳記』には無

二宮尊徳の言葉を記録した『二宮翁夜話』には、一つだけ「心田」があります。ただ、これから尊徳の「心田」が仏教の「スッタニパータ」が元か私には分かりません。

明治18年の尊徳の伝記、『報徳記』には、「心田」の用例はありません。



『二宮翁夜話』一二宮尊徳の門人・福住正兄が、師の身边で暮らした4年間に書き留めた《如是我聞録》を整理し、尊徳の言行を記した書。1884～87年正編5巻刊行。

『二宮翁夜話 卷之3』福住正兄 記・報徳社 明治17-20〔国会図書館デジタル〕

報徳記.富田高慶 編.大日本農會.明19.2〔国会図書館デジタルより〕

『報徳記』一二宮尊徳の伝記。尊徳の女婿にあたる門人富田高慶著。8巻。安政4（1857）年成立。寺門静軒の尊徳伝記にあきたらず、高慶が「富国安民の法」である報徳仕法を尊徳の言葉を通して世に伝えようとしたもの。尊徳の出生から一家の再興、六百余町村の復興などを語り、その間に逸話などをはさみ、尊徳の思想が明らかにされている。（ブリタニカ国際大百科事典ネットより取得）



## 尊徳顕彰の三つの峰

桜井武雄氏は二宮尊徳が脚光を浴びる時期を三つに分けています。

第一の峰である明治10年代に『二宮翁夜話』、『報徳記』が出版されています。

第二の峰は**地方改良運動**が行われる頃で、『修養論』などで、「心田」が説かれます。明治39年の『御神楽歌述義』が七下り目の解釈に「心田」を使うのもこの時期です。

第三の峰の時期に小学校などに尊徳像が作られます。

日本資本主義のこの急速なめまぐるしき発展が、決して平板な流水的過程ではなくして、ヂグザクなそれ自身の内在的矛盾の展開過程である如く、これに対応して、**尊徳復興の波**にもいくたびかの起伏があつた。

われわれはこの起伏に三つの峰を見出すことができる。

**第一の峰**は、資本の原始的蓄積典型期—とくに**明治十年代**の農村揺撼期。明治維新と共に尊徳の報徳諸仕法は一たん断絶し、主として駿遠豆相の諸州に残った門弟（＝地主・村吏）等が「二宮先生の遺教に拠り、報徳事業を行ふ」報徳社を組織してわづかに遺教を伝ふるのみであつた。しかるに、資本の原始的蓄積過程に醸し出された農村クリーゼ（※危機）を切り抜けるための「勸農策」として、明治政府官僚は二宮尊徳の事業を顕彰し、これを継承受容するの策をとつた。明治13年、政府は一尊行一尊親の三代の功を賞して、尊親に金廿円を下賜、尊親を助けて興復社を起せる富田高慶を正七位に叙し、翌14年には興復社の事業資金としての金壹萬五千圓を貸与し大いにこれが助成をはかつた。—中略—

**第二の峰**は、日本の資本主義が、産業資本確立、金融資本成立、—主義転化への発展旋回を遂げて半封建的零細農経済を揺揺せしめ、**日露戦争を転期として農業クリーゼを現出せし時期**。この時、すなはち明治38年は尊徳没後50年にあたり、各地において盛大な五十年祭が祝はれた。東京では、平田東助、岡田良平、一木喜徳郎、井上友一、留岡幸助、早川千吉郎等が発起人となり、上野の東京音楽学校内で盛大な五十年祭が催され、ついで中央報徳會が創立され、機開誌「斯民」を発行して報徳主義の鼓吹宣傳を開始した。翌40年神奈川県小田原に開催された報徳講演會には全国の有志參集する者二千余名。以来京都、大分、香川を初め各地に、府県農会主催で同様の挙がつづいた。

**第三の峰**は、いふまでもなく、農村問題がいよいよ激化して遂に**昭和5年来の未曾有の恐慌に直面せる今日**。（『日本農本主義』P277. 桜井武雄. 1974. 青史社. 初版1935）

これは『報徳記』を書き直したもののようです。明治18年の『報徳記』には、「心田」という言葉はなかったのですが、それ以後に「心田」という言葉が伝記に使われるようになったということでしょうか。

夫れ人道の尊む可きは、己に克つの教なり、己は私慾なり、私慾に田畑に例ふれば草なり、克つとは此田畑に生ずる草をけすり捨て、取り捨て我心の米麥を繁茂せしむる勤めなり。  
と、訓へられて居る、これが即ち先生の精神的勤勞主義である、此心田に生ずる雑草を取拂ふと云ふことは勤勞中の最も高尚であつて且最も困難なるものである。而し先生の訓へが此點に重きを置かれたのは先生の偉大なる所以であつて亦其遺教たる報徳教が救民濟世の大使命を有する所以である。故に總ての人が先生の教を守つて、至誠によつて勤めしならば、世に復難なる貧困と富貴の原因が消へて、勤勞即ち富貴幸福と云ふ、單純愉快な現象が来るに違ひないのである。

夫れ我が道の尊む増殖の道は、直ちに天地の化育を賛成するの大道にして、米五合にても麥一升にても芋一株にても、天つ神の積置かるゝ無盡藏より鉄鎌を以て此世に取出す大道なり、是を眞の増殖の道と云ふ尊むべし、務む可し。  
天津日の恵み積み置く無盡藏、  
鉄で掘り出せ鎌で刈りとれ。  
と、訓へられて居る、それで此の鉄で掘り出す事鎌にて刈り取る事は即ち勤勞であつて、天の恵みを人間が受取めんとするには、勤勞の外に需る事が出来ないと言はれたのである、それから先生の斯の勤勞主義は之を精神的及物質的の兩方面に分れをこども知らねならん、「夜話」に曰く、

興復社の他の特色は善行獎勵と、報徳會と窮民救濟の事で、二宮尊徳先生の遺訓なる「何事を爲すにも心田を開くが急務である。心田を開墾せざれば何事も成らず」と云ふ言葉に従ひ、毎月二十日先生の命日には移住民一同の集會を催して、報徳、修養、道徳、經濟、農業等の講話研究をなし、又毎年末には精勤農や篤行者の賞與を行つてゐる。賞與の法は移住民全體から投票で選舉させ、一等から五等まで賞與する事になつて居るのである。

『報徳記』1957年発行の口語訳  
—「心田の開発」がある—

1957(昭和32)年に書かれた『報徳記』の口語訳に「心田の開発」という言葉が出てきます。松沢成文氏の『教養として知っておきたい二宮尊徳』にある「心田開発」は、ここあたりからとられたものでしょうか。

三 金次郎の本格的な報徳の仕法  
—建設的な新木の糞培—  
桜町の仕法の体験の中から、報徳の仕法を生ずるに至ったが、教化と事業とが一体に強化されてゆくのである。中でも貧農の中から出精人を選挙によって選び、これに無利息金の年賦貸付を強化して、生きようとし伸びようとするものを引立てつつ、これを毎年くりかえして村全体の立てなおしの原動力としようとしたが、この助貸も新木糞培の一つの道である。  
一言にいうと古木の糞培は、自力に立ちあがらせる自覚や向上心をなくし、依頼心や破滅的な心理をつくることを恐れ、新木の糞培を悟ってからは、さらに教化を重視し、人間の精神から立てなおし、心理から改善するように心田の開発に力を入れ、物心一如に人民の生活と村の生活の立直おしをはかったのである。

P61

世界を一つにする心田の開発  
今や世界は、二つの思想、二つの帝国主義の対決と混乱に悩みつつ、西洋文明のゆきづまりの叫ばれるとき、また日本はアジアの解放に寄与し、原水爆の禁止に努力するとき、そして日本は主体性にたつ民主的な再建をなさねばならぬとき、尊徳の思想は、単に日本の背骨をなすのみでなく、新しい世界の建設に一つの光と道とを示すものである。尊徳は心田の開発を第一としたが、日本にとって今日ほど心田の開発の必要なときはない。道徳と経済とにしっかりした民主的な日本をつくるために。また人類にとっても、今日ほど心田の開発の急務のときはない。自由と調和と帰一との、世界を一つに生きる新しい世界精神を養うためにも……。

P6

民衆思想家である安丸良夫氏は、尊徳について通俗道德の実践による自己変革を目指し、問題解決の方向を社会変革に向けることはなかった、社会体制全体の客観的な分析力を欠いていたと厳しい評価をしています。

本稿が対象としているような民衆的諸思想（※通俗道德）は、農業生産力の発展に重要な役割をはたした。品種改良、正条植、種籾の塩水選と薄蒔化、施肥の増大などは、近世後期以降における農業生産力発展の基本的技術形態だったが、これらの技術の改善と普及は、報徳社やたくさんの老農たちによるところが大きかった。たとえば、優良品種「伊勢錦」を選抜した老農岡山友清は、不二道の熱心な信者だった。彼は、信仰にささえられた庶民的な社会奉仕と開物精神にもとづいて、松坂、津、宇治山田において伊勢参宮の人々をめぐらした無償種子頒布所を設け、この新品種の普及をはかった。中村直三は、この「伊勢錦」の普及に努力したが、そのさい心学の社友にはかって資金を集め、その品種の特質や栽培方法を記したパンフレットを付して各地へ送った。不二道や心学にもとづく信念が彼らの活動をささえるとともに、その組織が重要な役割をはたしているわけである。幽学や**報徳社の運動**も、こうした**技術改善と精神運動の結合したもので**、たとえば正条植の普及には報徳社の功が大きかったし、幽学も正条植を教えた先覚者の一人であった。**精神運動によって技術改善に努力する主体をつくり、技術改善によって精神運動の成果を具体的に確保して、相互補完的に展開した**のである。だが、こうした**技術改善－農業生産力発展の基本的な方向は、労働過程の質的変革をとともなわない労働集約的なものだった**。だから、原蓄期の苛酷な条件のなかで、こうした技術改善が十分に有効性を発揮するためには、**人々は従来よりもはるかに勤勉でなければならなかった**。小川誠氏は、報徳運動の指導者であった安居院義道の農業技術体系を検討して、**一般水準の二倍以上の多労働を必要とするものだった**としている。安居院は、彼の技術体系を採用すれば当時の水準の二倍にあたる反当10俵も収穫できるというのだが、しかしそれは**一般農民にとっては、特別な勤勉－多労働に媒介されなければ実現しえないことだった**のである。**尊徳**や中村直三は、右のような性質の**農業生産力の発展に望みをたくして、一揆や村方騒動に反対**した。彼らも、民衆の貧困の重要な原因が苛酷な封建搾取にあることを知っていたが、封建権力の制限や撤廃による解決にはほとんど努力しなかった。彼らに封建制批判が皆無だったとはいえないかもしれない。**尊徳**は、商人が家を譲るように有能な者に政をまかすべきだと主張したし、領主権力の収奪に「分度」を設けることを強くもとめた。また、安居院義道には、「ここかしこ民の貢をかき集め／金の利足にやる人もあり」というような見解が散見できる。また、**中村直三はのちに貢租の軽減に奔走した**し、報徳社の指導者岡田良一郎のように自由民権期に活躍した者もある。だが、**彼らは問題解決の主要な方向を社会変革におくことはけっしてなかった**。彼らは、**人々を実直で勤勉で忍耐づよい人間に自己変革する**という論理にふかくとらわれており、そうした自己変革をとりまく**客観的条件についての洞察力や批判力にとぼしかった**。**民衆的諸思想の経験主義的な認識力は、せまい人間関係のなかでは、ある意味できわめて鋭かったが、社会体制全体の客観的な分析力を欠如**していた。（『日本の近代化と民衆思想』P44. 安丸良夫）

天理教文献にも「心田」は使われています。明治39年出版の『御神楽歌述義』に出てきます。これは一派独立のための提出資料として作られたものです。ここで「でんち」は「心田」とされ、実際の農業ではなく、心の問題とされています。これはそれ以前の解釈に対する大転換です。

十ド このたびいちれつに  
ようこそたねをまきにきた  
たねをまいたるそのかたハ  
こえをおかずにつくりどり  
此ノ章ノ大意ハ救済恩寵ノ種子ヲ求メントテ  
来レルモノヲ美メ給ヘルナリ  
このたびハ教徒教祖ニ来リタル時ナリいちれ  
つハ前積ノ如シようこそたねをまきにきたト  
ハ種子ヲ播キニ来レルヲ美メ給ヘル語ナリた  
ねをまいたるそのかたトハ種子ヲ播キタル後  
ハト言フ義ナリ こえをおかずにつくりとりトハ世  
間有形ノ田地ト異ナリタルヲ示サレタルモノニシ  
テ信仰ノ培養ヲ要セズト言フ義ニハ非ザルナ  
リ  
本章ハ教徒教祖ノ導キ給ヘルマニ／＼来リテ  
其ノ **心田**ニ救済恩寵ノ種子ヲ受ケントセルヲ  
嘉(※よみ)シ給ヒ苟(※いやしく)モ信仰ノ培  
養ヲ缺カズバ世間有形ノ田地ト異ナリテ其ノ  
収穫必ズ豊穰ナルベシトノ意ヲ述べ上来反覆  
訓諭ノ効驗アリシヲ喜ビ給ヘルナリ  
窃(※ひそか)ニ思フニ基督教福音書ニ有名ナル  
播種ノ譬アリ是教祖ノ教訓ト甚ダ相似タリ  
然レドモ彼ハ彼ノ信仰ノ譬諭(※ひゆ)ニシテ  
此ハ此ノ信仰ノ譬諭ナリ故ニ相似タル所ハ譬  
諭ニシテ教理ニアラザルナリ一 下り目第三章  
小兒ノ譬諭モ亦異ナルコトナキナリ (『御神楽  
歌述義』 P106. 明治39年. 中山新治郎)

所以ナリ  
三ツみなせかいのよゝろにはでんちのいらぬ  
ものはない  
此ノ章ノ大意ハ天下萬人ノ **心田**ヲ必要トスルコトヲ譬諭ヲ以テ示サ  
レタルナリ  
みなせかいのよゝろにはトハ世人ノ心ニハト言フ意ナリでんちのい  
らぬものはないトハ田地ヲ必要トセザルモノハ無カルベシトノ義ナ  
リ  
田地ハ肉體生活ノ源ナリ苟モ之ニ穀種ヲ播キ培養シテ怠ルコト無ク  
バ収穫豊饒ニシテ衣食充足スベシ誰カ之ヲ必要トセザラン **心田**ハ  
精神生活ノ源ナリ救済ノ種子ナリ此ニ受ケ信仰ヲ以テ之ヲ培養スル  
キハ靈化發生シ道德及ビ幸福日ニ増進シテ永遠不滅的ナル精神ノ愉  
樂ヲ得ベシ是ヲ以テ教祖ハ天下萬人ノ有形ノ田地ヲ必要トスル意ヲ  
九十七

四ツよきぢがあらばいぢれつにたれもほし  
であらうぢな  
此ノ章ノ大意ハ天下萬人 **心田** 収穫ノ豊饒ヲ希望スルコトヲ譬諭ヲ以  
テ示サレタルナリ

七ツなんでもでんちがほしからあたひはな  
にはどいるとて  
此ノ章ノ大意ハ教祖 **心田**ノ収穫豊饒ナランコトヲ欲シテ辛苦艱難ヲ  
辭シ給ハザルコトヲ譬諭ヲ以テ示サレタルナリ

九ツこゝはこのよのでんちならねしもいつか  
りたねをまこ  
此ノ章ノ大意ハ教祖自己ノ **心田**ニ救済恩寵ノ種子ヲ播カントシ給フ  
コトヲ譬諭ヲ以テ示サレタルナリ

明治29年には、「こえのさづけ」=「こえおかず」文字通りに解釈されていた！

世間、新聞等の非難にさらされる「肥を置かず」—「肥(こやし)を置ずに物が造り取れるか・・・国家に益なく害のみ多し」

明治29年4月6日、内務大臣吉川顕正から天理教の取り締まり強化のために天理教では「秘密訓令」と呼ばれる内務省訓令が公布されました。その内容は、天理教の活動に見られる医薬妨害、寄付強制、男女混濁などを取り締まるという通達でした。この訓令が出る約一カ月前に出版された「みかぐらうた」の解説書『天下一品美嘉具羅歌』には、「肥(こやし)を置ずに物が造り取れるか・・・国家に益なく害のみ多し」という言葉が出ています。これは「こえを置ずに作りとり」という言葉に世間では論難攻撃が激しくなっており、その攻撃文句で、それにたいして、「みかぐら歌の譯(わけ)を詳述して世の惑(まどひ)を解」こうというのが『天下一品・・・』の趣旨と思われま

す。ここから読み取れることは、当時実際に金肥を入れないで作物を作ろうとした天理教信者がかなりの数存在したのではないかということです。それゆえ「肥を置かず」のうたについて「世間の攻撃尤も甚し」という状況になったのではないのでしょうか。前年日清戦争が勝利の形で終わり、さらに富国強兵策を進めようとする国家にとって、「肥を置」かないという収穫量の減少が目に見えているやり方を推奨する天理教は許し難い存在だったのです。

これに天理教はどのような対応策をとったのでしょうか。その答えが、明治33年の『御神楽歌釈義』であり、同39年の『御神楽歌述義.全』です。「肥のさづけ」は「声の授け」にし、「肥置かず」は信仰上のたとえとしたのです。

「声の授け」は戦後「肥のさづけ」に戻りましたが、拝み祈祷的な解釈、糠三合、灰三合、土三合＝金肥2俵分はそのままです。「肥置かず＝信仰上のたとえ」の方は現在にも引き継がれています。

『天下一品美嘉具羅歌』 明治29年2月22日刊.筒川すゑ子.P20 (※七下り目) 十ド

このたびいちれつに ようこそたねをまきにきた  
たねをまいたるそのかたハ こえをおかずに作りとり  
とある歌に於いては世間の攻撃尤も甚し或は新聞に雑誌に  
又書物に於てこの歌の道理に合 (かな) はぬを論ぜり **肥(こ  
やし)を置ずに物が造り取れるか**然らば農耕に肥料 (こやし)  
は要せざるなり天理教会の主意は斯 (かか) る瞞着主義な  
れば**国家に益なく害のみ多し**故に**天理教を退治せねばならぬ**  
**撲滅せねばならぬ**我々四千万同朋の中に斯る邪教を奉ずるも  
のありては国家衰弱の基なり故に誓て天理教会に入るべか  
らずといふ規約を結びて未然に防 (ふせ) がざるべからず  
とせる所も多く之を賛成する論者も多し吾々は嗚呼  
(あゝ) と歎声を出 (いだ) すの外なし こえを置ずに作り  
とりといへる文句に就て世人は斯 (か) く論難攻撃せるもの  
なり故に吾人は戦捷国の日本として文明の日本として国体  
の秀逸なる日本として未 (いま) だ斯 (かく) の如く論難  
する愚者があるかと思へば泪の襟を濕 (うるは) すを知ら  
ず斯 (か) くいふ時は我々をも迷信者なりとそしるものあ  
らん因 (よつ) て吾々は今此 (この) **みかぐら歌の譯(わけ)**  
**を詳述して世の惑(まどひ)を解**き併 (あは) せて蒙徒を五里  
霧中より救ひ出 (いだ) して天理の光に将 (また) 日月  
(じつげつ) の光りを誠に蒙 (かうむ-※身に受ける) ら  
しめんとす

明治33年から大正期の「一下り目一ツ、正月  
こゑのさづけは やれめづらしい」の解釈

①②は政府へ提出用の文書。③は①②を踏まえた教内向け。どれも「こえ＝声」です。④は「こえ＝声」を踏まえたうえで、「こえ」は肥ではないかという教内の疑問を提示しています。

① 此ノ章ノ大意ハ我等靈救ノ聲ヲ聞クヲ得ルハ未曾有ノ一大慶事ナルコトヲ示スナリ  
正月ハ一年ノ始ニシテ真道宣傳ノ初二諭フこゑのさづけハ靈救ノ聲ヲ我等ニ授ケ給フナリやれめづらしいハ此ノ零救ノ聲ハ未曾有ナリト云フ義ナリ（『御神楽歌釈義』P15. 明治33年. 中山新治郎. 天理教会本部）

② 此ノ章ノ大意ハ救済ノ恩寵始メテ人間ニ降レルコトヲ示サレタルナリ  
正月ハ歳ノ始ニシテ此ニハ教祖立教ノ初二諭ヘラレタルナリこゑのさづけハ我々人間救済ノ要求ニ應ズル天啓ノ聲ナリやれめづらしいトハ此ノ天啓ノ聲ハ未曾有ナリと云フ義ナリ（『御神楽歌述義』P17. 明治39年. 中山新治郎）

③ 「正月」は歳の初め、ものみなの一新する時である。そこで、教祖立教、世界の立てなほしに着手するを、正月にたとへたのである。「こゑのさづけ」は、我々人間の救済を要（もと）めるのに應ずる天啓の聲といふ意。「やれめづらしい。」とは、此の天啓の未曾有なるをいふ。（『天理教全書』P394. 大正11年. 神田豊穂. 春秋社）

④語義 ○正月一年の初めの付き。一月。○こゑのさづけ、天啓の聲の人類に示されたること。○やれめづらしい。やれ珍しいことである。  
解説 正月は還元の月である。物総て一新される月である。天啓の教祖を通じて人類に啓示されたるは、恰も年の一新するがごとく、天啓のあった日、天保九年十月廿六日は人類の一新すべき日であり、宇宙の一新すべき日である。物皆一新されて幸福を喜ぶが如く、或は病の源、或は苦の根源が明にされ、人間の意識の一新された幸福の日である。そしてこの天啓の聲こそは過去数年の間、物質的にまた精神的に苦患の多かった人類にとっては一大驚異である。こゝに人間生活の上に一新紀元が開かれたのである  
註(一) 正月 みかぐら歌は慶應三年正月より初まりたるが故に用ゐたるか また一ツといふにより初まりの意に用ゐたるか。／ 正月は還元を意味してゐる。また神一条の世界の原始、人類思想の立替、宇宙萬有の一新といふ意味が含まれてゐる。  
註(二) こゑのさづけ、天啓の聲の教祖を通じてあらわれたるを言ふと雖も亦肥のさづけの意もあると思ふ。後章、よのなか（豊年の意）つくりとる、ほうねん、また七下り第十章こゑををかずにつくりとり、等より考察すると本教の開拓を農事に譬えて言はれたものにして、こゑにはこえ（肥の）意があると思ふまた  
だいいちはりうけつくるをたすけたさこゑいちじようをおしへたいから（※13 - 60）  
こゑやとてなにがきくとはおもふなよこゝろのまことしんじつがきく（※4 - 51）  
等のお筆先によつてもこゑは、肥の意に仰せられたことは立派に裏書きされてゐる。  
糠三合、灰三合、土三合を合はした肥は金肥以上の効験（ききめ）があるといふこともある。  
肥は、生物の發育力を補うものであり、且まこと真実である。本教の出現は人類一般に對する精神發達を補ふものであるが故に之に譬へて仰せられしものならんか。（『御神楽歌詳解』P27. 大正13年. 藤川春雄. 心の友社）

## 明治33年作『御神楽歌釈義』

一派独立のための文書として明治33年に書かれた『御神楽歌釈義』に、「心田」はありません。「田地」がそのまま使われています。先述したように明治39年の『御神楽歌述義』では、「田地」のかわりに「心田」が使われています。「心田」にすることによって実際の田地の話ではないことが明瞭になっています。

教義の整優に関しては、同33年4月より、京都の宗教哲学者中西牛郎氏が、同年5月より、大阪朝日新聞の名記者であった宇田川文海氏が、又続いて8月より、神道学者である井上頼圀、逸見仲三郎両氏等が、次々と本部に呼び寄せられることとなった。中西氏は、みかぐらうた釈義、井上、逸見両氏は専ら教典編纂並びに同釈義、宇田川氏は、当時唯一の機関雑誌『道の友』（101号より）と、それぞれ専心することとはなったのである。（『潮の如く上』P55. 上村福太郎. 1959. 道友社）

る所を究めずして我天理教を誹議罵詈するものあるは是れ亦前代思想の遺物にして尤むるに足らずと雖も識者にして且つ之に附和雷同するものあるは誠に慨歎の至りに堪へざるなり是に於てか予等は我天理教の真相を明かにして世人の惑を解くべきの義務あることを感じ先づ御神楽歌十二篇を解釋して之を世に公にすることとせり即ち此の釋義是れなり

世人御神楽歌の典雅莊重ならざるを以て輕侮の念を生ずること勿れ何となれば御神楽歌は教祖が如何なる社會下級の無教育者にも了解し易からんが爲めに歌ふたるものにして天下後世に傳ふるの輕典と

三ツみなせかいのころにはでんぢのいらぬものはなら

此ノ章ノ大意ハ田地ノ必要ヲ示スナリ  
みなせかいのころにはハ我等人類ノ心ニハト云フ義ナリでんぢのいらぬものはないハ田地ヲ以テ必要トセザルモノハナカルベシト云フ義ナリ

田地ハ衣食ノ源ニシテ人類生活ノ本ナリ誰カ之ヲ必要トセザルモノアラシヤ苟モ田地ヲ得テ之ニ嘉穀ノ種子ヲ播カンカ收穫豊饒ナルコト疑ヒナキナリ然レドモ種子ヲ播キテ收穫ヲ得ルモノハ皆田地ナリ豈ニ獨リ土地ノミニ限ランヤ今人子孫アリ善ク之ヲ教育シテ才徳アル人物トナスキハ子孫生長ノ後一家自ラ繁榮ナルベシ是レ賢子孫ハ土地ニ賢ルノ田地ニアラズヤ然レドモ陰徳アレハ陽報アリ積善ノ家ニハ必ズ餘慶アリ何トナレバ我等ノ刈ル所ハ我等ノ播ク所ナレバナ



現在の天理教は、「こゑのさづけ」と「こえをおかずに作りとり」をどのように解釈しているのでしょうか。最も新しい「みかぐらうた」の解釈本として、『みかぐらうた略解』をみてみましょう。この本では、「肥のさづけ」については、糠三合、灰三合、土三合＝金肥2俵分と、路金の話が出ています。「肥置かず」の方は、「神の田地」＝「ぢば、親里」と解釈して、「真実の種蒔き、即ち、(※ぢばに)ひのきしんに帰る人々に、肥料、いわば人為的な策を施さなくても十分な天の与えを恵むことを約束」されたのだと説明されています。

この『みかぐらうた略解』の内容は、上田嘉太郎氏の父である上田嘉成氏が昭和24年に書いた『みかぐらうた略註』と似ています。両方の説明を載せましたので、比較してみてください。この解釈の特徴は、「こゑのさづけ」の方が実際の農事の肥であるのに対して、「こえおかず」は、「たとえ」であるということです。

一ツ 目玉の主要なテーマは“豊作”です。「衣食住」と申しますが、食べることは、最も基本的な人間の営みであります。その食を得る営みの代表的なものである農業、農事に寄せて、信心の有り難さをお歌いになっています。

一ツ 正月こゑのさづけは やれめづらしい

**正月早々に肥のさづけとは、何と、滅多にない格別なことだ。**

「やれ」は感動詞です。何と。「めづらしい」珍しいは、ただ単に数が少ないというだけでなく、“愛(め)づ”が語源とされていることから分かるように、滅多にないほどに素晴らしいという意味です。本来、悪い意味では使いません。

肥のさづけは、これを戴いた者が、糠三合、灰三合、土三合を神前に供えて祈念し、各自の田に置くと金肥（油粕などの購入する肥料）二俵分の効き目があつたとされています。『稿本天理教教祖伝』には、「長の道中、路金なくては通られようまい。路金として肥授けよう」（48ページ）とありますが、路金は旅費という意味で、お道を通る上での抛り所、手掛かりになるということです。これは今日のさづけの理についても言えることでしょう。（『みかぐらうた略解』P37. 上田嘉太郎. 2019. 道友社）

一ツ 正月こゑのさづけは やれめづらしい

万物のはじまる目出度い正月に肥のさづけを戴く。あー、有難いことである。なんと親神様のご守護の結構なことよ。

**こゑのさづけ** 肥のさづけ。おさづけを戴いた者が、糠三合、灰三合、土三合を神前に供え、このさづけを取り次いで各自の田に置かしていただくと、肥一駄に相当するご守護をくださる。元治元年お渡しくだされた。「おふでさき」に、〈こへやとてなにながきくとハをもうなよ 心のまことしんぢつがきく 四 51〉と、お教えくだされている。（『みかぐらうた略註』P10. 上田嘉成. 1949. 道友社）

## 七下り目、十一下り目、「こえおかず」の解釈

「心田」の意味は現在まで継承されています。

### 『みかぐらうた略註』当該箇所

とうとうこの度、世界一列の人間が、この理に目覚めて、ようこそ誠真実の種をぢばへまきに来た。誠真実の種をまいた者は、金肥・人肥の目に見える肥料を置かずとも、天の理によって、親神の守護は次から次から現われてきて、豊かな天の与えを授けられる。／たね 尽す、運ぶ、救ける、誠真実の心、日の寄進の働きを種におたとえくだされている。

こえ 肥、金肥、緑肥、堆肥など、これらの肥は、目に見える稲や麦の根にこそ必要であるが、無形の種には金肥も人肥も必要はない。

### 『みかぐらうた略註』当該箇所

とうとう今年は、親神様の教えをよく悟って、真実の理を了解し、目に見える肥料のみに頼らずして、心の誠真実を親神様に捧げ、この日の寄進の真心をお受け取りいただいた理によって、十分に豊年満作のご守護をいただくことができた。こんな楽しい嬉しい結構なことではない。

こえ 肥、肥料。親神様のご守護をいただくには、日の寄進こそ第一の肥である。無形の肥を置き、無形の徳をいただくところにこそ、真に豊年満作・商売繁盛・子孫繁栄のご守護をいただくことができる。

七下り目十ド このたびいちれつに ようこそたねをまきにきた たねをまいたるそのかたハ こえをおかずに作りとり / この度は皆揃って、よくぞ真実の種を元の屋敷に蒔きに来た。種を蒔いた者は、肥料を置かずとも収穫することができる。 / この度は皆打ち揃って、よくぞこの元の屋敷、神の田地に真実の種を蒔きにやって来た。この神の田地に種を蒔いた者は、肥料を置かなくても、収穫、実りを得ることができる。より一般的には、農業者ならずとも、神の田地であるぢばに真実の種を蒔いた者は、肥料に譬えられる人為的な補助手段、策を講じなくても、十分な結果を得られるとの仰せです。 / 七下り目では、一言ひのきしんの話をする前置きされて、人間生活に欠かせない田地に託して、誰もが欲しがると申し出る決心の程を見定めて、この元の屋敷こそ神の田地、即ち蒔いた種が皆生える最高の田地であると、本真実を明かされます。 / ぢばがこの世の一切の守護の元であるならばと、真実の種蒔き、即ち、ひのきしんに帰り来る人々に、肥料、いわば人為的な策を施さなくても十分な天の与えを恵むことを約束されます。 / 世界のふしんが後半の主題だと申しましたが、その後半の初めに、ぢばに伏せ込むひのきしんを仰しゃいます。世界のふしんは、ひのきしんによって進められるということです。（『みかぐらうた略解』P119）

十一下り目十ド ことしハこえおかず じふぶんものを作りとり やれたのもしやありがたや ついに今年は肥を置かずに十分に作物を収穫することができた。何と頼もしいことか。有り難いことか。

七下り目九ッ、十ドに、神の田地に種を蒔いた人は、肥料を施さずとも収穫できる、とありましたが、人々が皆揃って、をやの思いが分かり、おぢばのふしんのためにと、夫婦揃って、また欲を忘れてひのきしんに馳せ参るようになり、ついに今年は肥、即ち人為的な施策を講じなくとも、十分な収穫、成果を得ることができると、ぢばに伏せ込むひのきしんの有り難さをお歌い下さいます。 / 十一下り目では、親神様がお鎮まり下さる地点、ぢばを確定、明示することに始まり、もっぱら、ぢばへの伏せ込みであるひのきしんの実践についてお歌いになっています。夫婦揃って、欲を忘れてとひのきしんの心得を諭される一方、土持ちを例にひのきしんの意義を教示されます。親神の思いが分かり、ひのきしんに励むところ、ついに、ぢばに蒔いた真実の種は、人為的な計らいをしなくても、十分な収穫を得ることができると、喜びと感謝の言葉を以て結ばれます。（『みかぐらうた略解』P169）

## 「こえ」は金肥と関連する

教祖が存命中に「こえのさづけ」を説いた時、それを聞いた人々は「こえ＝金肥」と理解していたことは、それが拝み祈禱的であるかどうかは別として、「灰三合、糠三合、土三合で金肥一駄分に相当」との話が伝わっていることから分かります。また、『天下一品美嘉具羅歌』の記述から明治29年頃まで、実際に金肥を入れずに作物を作っていた人がいたことも分かります。

こゑのさづけは / こゑはまく手、さづけは、押エの胆とされるが、意味としては押エではなくて授ける手、と、こぼさず有難く戴く手である。 / 肥のつとめにかけて、おちばよりおさづけ下さるさづけの肥で、灰三合、糠三合、土三合で金肥一駄分に相当する。金肥とは金銭で購う肥料のことである。従って、肥のさづけは、かぐらづとめによるものであり、おち・ばへ運んでこそ頂戴できるものである。（『天理教校論叢』25号.P38. 諸井慶一郎.）

**元治元年**の春から、教祖は、熱心に信心する人に、扇のさづけを渡された。これを頂いた者は、五、六十人あったが、山中忠七と仲田佐右衛門は、それ／＼ 扇、御幣、肥まるきりのさづけを頂いた。同年十二月二十六日には、辻忠作外数名の者がさづけを頂いた。この時、教祖から、 / 「前栽、喜三郎、平骨の扇渡す。これ神と申うて大切に祀れ。」 / 「同、善助、黒骨の扇渡す。」 / 「同、幸右衛門、御幣、肥授けよう。豊田、忠作、御幣、肥授けよう。これ末代と悟れ。長の道中、路金なくては通られようまい。路金として肥授けよう。」 / と、お言葉を頂いた。（『稿本天理教教祖伝』P47）

## 「おふでさき」の「こゑ、こへ」の用例

「おふでさき」には「こえ」の用例がいくつかあります。これらを「こえ＝声」と解釈するのは無理があります。

- 4号50. このはなしなにの事やとをもうなよ こゑ一ぢよのはなしなるぞや  
51. こへやとてなにかきくとハをもうなよ 心のまことしんぢつがきく  
9号10. にんけんによまいとゆうてないけれど このよはじまりしりたものなし  
11. この事をしらしたいからたんへと しゆりやこゑにいしやくすりを  
13号60. 大一わりゆうけつくるをたすけたさ こゑ一ぢよふをしへたいから  
61. こゑてもなどふしてきくとをもうなよ こゝろを神がうけとりたなら  
72. このさきはりゆけのこへをちがはんよ どふぞしいかりしよちしてくれ

4-51、13-61の「心」をどう解釈するかがキーポイントになります。

## 「修養」を説いた新渡戸稲造

ここから一般社会の話に戻ります。明治39(1906)年から東京帝大教授と兼任で第一高等学校校長となった新渡戸稲造は、『実業之日本』という通俗雑誌に明治40年頃から記事を書いています。『「修養」の日本近代』の著者大澤氏は新渡戸の役割を「新しく台頭していく大衆が道を踏みはずすことのないよう、働きながら意識し、取り組むことのできる修養を説いたのである」としています。

しかしそれは、松沢裕作氏が言う(当資料P21下段)「自分たちがより豊かになる可能性がないことを、彼らは経験を通じて知り、『自分の店をもち、一家のあるじになる』などという将来を夢みることをやめ」、「その日その日を生きてゆくこと」の手助けをしているだけではないかという気がします。

新渡戸の『修養』(1911※明治44年)と『世渡りの道』(1921※大正10年)は、数ある修養書のなかでも指折りのベストセラーである。『修養』は、昭和4(1929)年までに137版となり、『世渡りの道』も1926年までに72版、1929年までに86版を数えている。どちらも、彼が『実業之日本』に毎月寄稿していた文章を整理してまとめ、実業之日本社から刊行されたものである。英才を育成する第一高等学校(一高)の校長にして東京帝国大学の教員という、正真正銘のエリート・新渡戸の修養論は、大衆文化のなかで発信されたものであり、彼が働く青年たちに説いた修養は、金持ちになるための成功法や処世術とは、明らかに異なっていた。

(『「修養」の日本近代』P104. 大澤絢子. 2022. NHK出版)

エリート相手の教育者である新渡戸が『実業之日本』のような通俗雑誌に執筆することについては、周囲から批判の声が相次いだ。「通俗平易」な談話は、地位や職務に照らして感心しない、もう少し趣をつけるようにとの忠告も受けたと、彼自身が述べている。大学の同僚からも非難され、政治学者の小野塚喜平次(1871-1944)などは、その急先鋒だった。(『「修養」の日本近代』P108)

**新渡戸稲造**—教育家、農政学者。文久(ぶんきゅう)2年9月1日、盛岡(岩手県盛岡市)に生まれる。東京英語学校を経て、1881年(明治14)札幌農学校卒業。同農学校在学中、内村鑑三(うちむらかんぞう)らとともに受洗し、キリスト者となる。1883年東京大学に入学するも飽き足らず、翌1884年退学し、アメリカに留学。留学中、札幌農学校助教授に任ぜられ、農政学研究のためさらにドイツに留学。1891年帰国し、同校教授となる。1901年(明治34)台湾総督府技師に任ぜられ、殖産事業に参画。1906年第一高等学校校長となり、7年間在職。1909年より東京帝国大学教授として植民政策を講じる。1918年(大正7)東京女子大学学長。(日本大百科全書〈ニッポニカ〉デジタル版) 20

**働く大衆の教養と修養** / 新渡戸が一高の校長を務めつつ『実業之日本』に寄稿していた時期は、大衆の存在感が増していく時期でもあった。日露戦争後の日比谷焼き打ち事件に始まる民衆騒擾は護憲運動や米騒動に発展し、そこへ第一次世界大戦後のデモクラシー思想が加わっていったとされてきた。だが、近代の都市部で起こった日比谷焼き打ち事件には、貧困などの苦しい現実から脱出したいという「世直し」的な観念はうかがえず、参加者は、農村から都会へ出て野望と挫折感の両方を抱えていた職人や工場労働者（職工）、日雇い雑業者（荷役人や車夫など）といった男性労働者たちが多かったとされる。彼らは、腕っぷしの強さや豪快さといった「男らしさ」を身につけ、「飲む・打つ・買う」という、通俗道徳に反した振る舞いによって、社会的な成功や立身出世とは異なる独自の価値観を作り上げていったという。日比谷焼き打ち事件はこうした男性労働者たちのエネルギーが吐き出されたものであり、彼らのエネルギーは目の前の権力である雇い主や富裕層、そして警察権力に対して向けられていったのだった。その後大正期に入り、国家の価値が相対化されるようになった1920年代において、「国家や国家の政治ではなく、大衆の日常生活がその中にあるような社会」が初めて人々の前に実感をもって現れるようになった。大衆は、そのような社会を埋め尽くすものとして登場した。新渡戸は、こうして新しく台頭していく大衆が道を踏みはずすことのないよう、働きながら意識し、取り組むことのできる修養を説いたのである。（『「修養」の日本近代』P130. 大澤絢子. 2022. NHK出版）

若い男性労働者の「あえて」通俗道徳を無視する、というカルチャーは、確かに「通俗道徳のわな」に対する一つの抵抗のしかたです。しかし、それだけでは「通俗道徳のわな」から逃れることはできません。/ 第一に、それは、単純に通俗道徳をひっくり返して反対のことをやっているだけだからです。「良い」とされていることをやらない、「不良」のカルチャーといってもよいと思います。世の中で良いとされていることを「あえて」やらないという態度は、世の中で良いとされていることが何であるか、身に染みて分かったうえでの態度です。「世間の人はこちらの悪いことだと思っただろうな」と、メインストリームのカルチャーを横目でみながら、浪費したり暴力をふるったりしているわけです。当然、そこには、劣等感がともないます。「本当は良いことを自分はやっていない」という劣等感です。「不良」のカルチャーは、「通俗道徳のわな」から自由ではないのです。/ 第二に、彼らが通俗道徳にしたがおうとしたがうまいと、社会全体が「通俗道徳のわな」に人びとをはめ込むような仕組みになっている以上、事態はなにもかわらない、ということです。どうせ貯金できない状況に置かれた人が、いかに強がって「貯金なんてかっこ悪いぜ！」と試みてみたとところで、世の中はなにもかわりません。むしろ、通俗道徳にもとづいて行動している人たちは、そのような暴れる若者たちをみて「ああ、あいつらはああやってまともな生活をしないからいつまでも貧困から抜け出せないんだな」と思うでしょう。それは「わな」にさかっているようにみえて、実は、「わな」を強化しているようなものです。/ 残酷な事実です。暴動への参加者が若い男性に限られるのは、都市の下層民たちは年齢を重ねるにつれ、こうした残酷な事実を理解するようになるからです。自分たちがより豊かになる可能性がないことを、彼らは経験を通じて知り、「自分の店をもち、一家のあるじになる」などという将来を夢みることをやめます。もはやあえて暴動に参加して不満を爆発させることもなく、彼らはその日その日を生きてゆくことになるのです。（『生きづらい明治社会』P138. 松沢祐作. 岩波ジュニア新書. 2018）

幸之助のことは、ビジネスの現場だけでなくプライベートな場面でも、人々の心の拠りどころとして求められてきた。彼は、人として一番大事なことは心の富を得ることであり、この点はいまだ自分は貧弱であるから、「大いに心の富を積むべく修養に努めている」などと社員に語っていた。自ら努力を積み重ね、自分を成長させていくことを人々に説き、広く日本社会に影響を与えてきた彼は、国民的修養家だと言える。／ところが、幸之助は当初、人々を教え導く人生の指南役というよりも、長者番付の常連や金持ちの成功者として語られる傾向にあった。メディアは彼を「億万長者」として取り上げ、昭和35(1960)年に刊行された『仕事の夢・暮しの夢(幸之助が1957年から『実業之日本』に連載していた文章を集めた書)では、彼のように億万長者になるための方法(ハウツー)や処世術が売りとされていたのだ。

**国民的修養家へ**／なぜ、幸之助に対する世間のイメージは変化したのか。／彼の位置づけが、富を獲得した成功者という範疇を超えるようになるのは、経営の一線を退いて会長となった昭和36(1961)年以降とされる。1960年代、日本では幸之助のような日本人実業家が注目され、その生き方や考え方を模範とするという、新たな動きが起こった。／一中略一／さらに、幸之助率いる松下電器が担った家庭の電化は、女性たちを家事労働から解放するだけでなく、彼女たちの文化水準を向上させるにあたっても重要な役割を果たした。／一中略一／昭和33(1958)年、幸之助はフィリップス社との提携によって日本とオランダの友好親善と経済交流に貢献したことを評価され、オランダから勲章を授けられた。アメリカのNew York Timesやbusiness Week、ロンドンのFinancial Timesといった英米の一流紙誌でも幸之助が紹介された。彼のイメージが「世界のマツシタ」へと変化した決定的な契機は、日本の財界人として初めて、アメリカの雑誌TIMESの表紙を飾ったことであつた。昭和39(1964)年には、発行部数800万部を誇る雑誌LIFEも「トップの産業人」「最高額所得者」「哲学者」「雑誌出版者」「ベストセラーの著者」という五つの顔を持つ人物として彼を取り上げた(写真4-3, 4-4)。

欧米で認められ、アメリカの二大雑誌で大きく紹介されたことのインパクトは絶大だった。昭和35(1960)年に所得倍増計画を打ち出した池田勇人首相とは1963年にNHKの番組で対談し、日本一の高額納税者として大阪国税局の「一日国税局長」にもなった。翌年には、文部省が戦後初めて作成した中学一年生向けの道徳の資料集に松下の文章が採用され、新聞は彼のことを二宮尊徳のような「戦前の大物」に代わる新しい「理想的人間像」だと報じた(『毎日新聞』『朝日新聞』1964年2月2日付)。1965年にはNHK紅白歌合戦の審査員にもなった。貧しく、学歴もなかった丁稚奉公の少年は、国民的存在にまで上りつめたのである。(『「修養」の日本近代』P143)



写真4-3 『TIME』(1962年2月23日)表紙

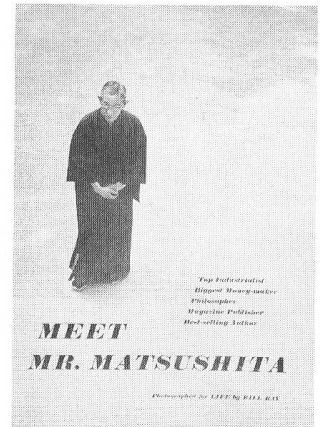


写真4-4 『LIFE』(1964年9月11日)より

昭和7年、松下幸之助が天理教会本部を訪問しています。幸之助は天理教の姿から「産業人の真の使命とは何かを自覚」したとあります。天理教は教祖50年祭に向けて動いていた時点で、昭和9年の教校別科生は年間17000人に達しています。ではこの当時、天理教はどのような教理を説いていたのでしょうか。

幸之助が七精神（当初は五精神）を掲げるに至る前段階としてもう一つ重要なのが、天理教との出会いである。幕末期に奈良で生まれ、神道系の新宗教のなかでも比較的長い歴史を持つ天理教は、関西を中心に飛躍的に信者を増やし、大きく発展していった教団である。天理教本部をはじめ、教団関係の施設が集中する奈良県の天理市は「宗款文化都市」としても知られている。／ 昭和7(1932)年3月、幸之助はある顧客に誘われて天理教本部を訪れた。当初は乗り気ではなかったが、顧客の熱心さに押され、軽い気持ちで本部の見学に出かけることにしたのだ。それまで彼は、東本願寺や西本願寺をはじめ、さまざまな宗教の本山に足を運んだことは数多くあったが、**天理教の主たる施設の広大さは他に類を見ず、本殿の壮大さや普請の立派さ、掃除が行き届いた清潔さと静粛さに、思わずありがたさを感じた**という。付属の学校や図書館を見て回り、**入校者五千人を超える教校も参観**。建築中の教祖殿その他、本部所属の建物の建設用材を加工する製材所も見学した。**何より感激したのが、普請のために働く人々の姿だった**という。毎日、百人近い人々が製材に従事し、額に汗して働く姿には独特な厳粛さがあり、敬虔さも覚えた。巨大な建設事業が奉仕によって進められ、材木も献木であることを教えられて、しばし感無量だったとされる。

信者になる気は起こらなかったものの、「あの山なす献木、教祖殿建設の信者の喜びに充ちた奉仕ぶり、塵ひとつもとどめぬ本殿の清掃ぶり、会う人ごとの敬虔な態度、教校の多数の生徒、半期修して卒業すれば、神の遵奉者として他を導くであろう活躍ぶり等々、**一糸乱れぬその経営**」が頭から離れなかったという。**あの宗教は、悩んでいる多くの人を導き、安心を与え、人生を幸福にする「聖なる事業」**である。人間生活は、精神的安心と物資の豊富さによってその幸福が維持、向上され続ける。どちらも欠けてはならない。自分たちの事業も、あの宗教の運営と同じように人間生活の維持向上に必要な物資を生産する聖なる事業であり、なくてはならない経営だ。われわれの経営こそ、事業こそ、あの宗教以上に盛大な繁栄をしなければならない聖なる事業であると、彼は思った。（『「修養」の日本近代』P171. 大沢絢子. 2022. NHKブックス）

■37歳 天理を訪ねて 1932（昭和7）年3月、幸之助は熱心な天理教信者であった取引先の知人に誘われて、奈良県の教団本部を訪ねます。そこで目の当たりにした光景、とりわけ無償の奉仕活動に喜びにあふれて精を出す信者の姿に触発され、産業人の真の使命とは何かを自覚するに至るのでした。

パナソニックホールディングスのHP

37歳 天理を訪ねて

1932(昭和7)年3月、幸之助は熱心な天理教信者であった取引先の知人に誘われて、奈良県の教団本部を訪ねます。そこで目の当たりにした光景、とりわけ無償の奉仕活動に喜びにあふれて精を出す信者の姿に触発され、産業人の真の使命とは何かを自覚するに至るのでした。



1932(昭和7)年、教団本部での見学の様子。こうした姿が幸之助の心をとらえたのであろう(写真提供：天理教会本部)

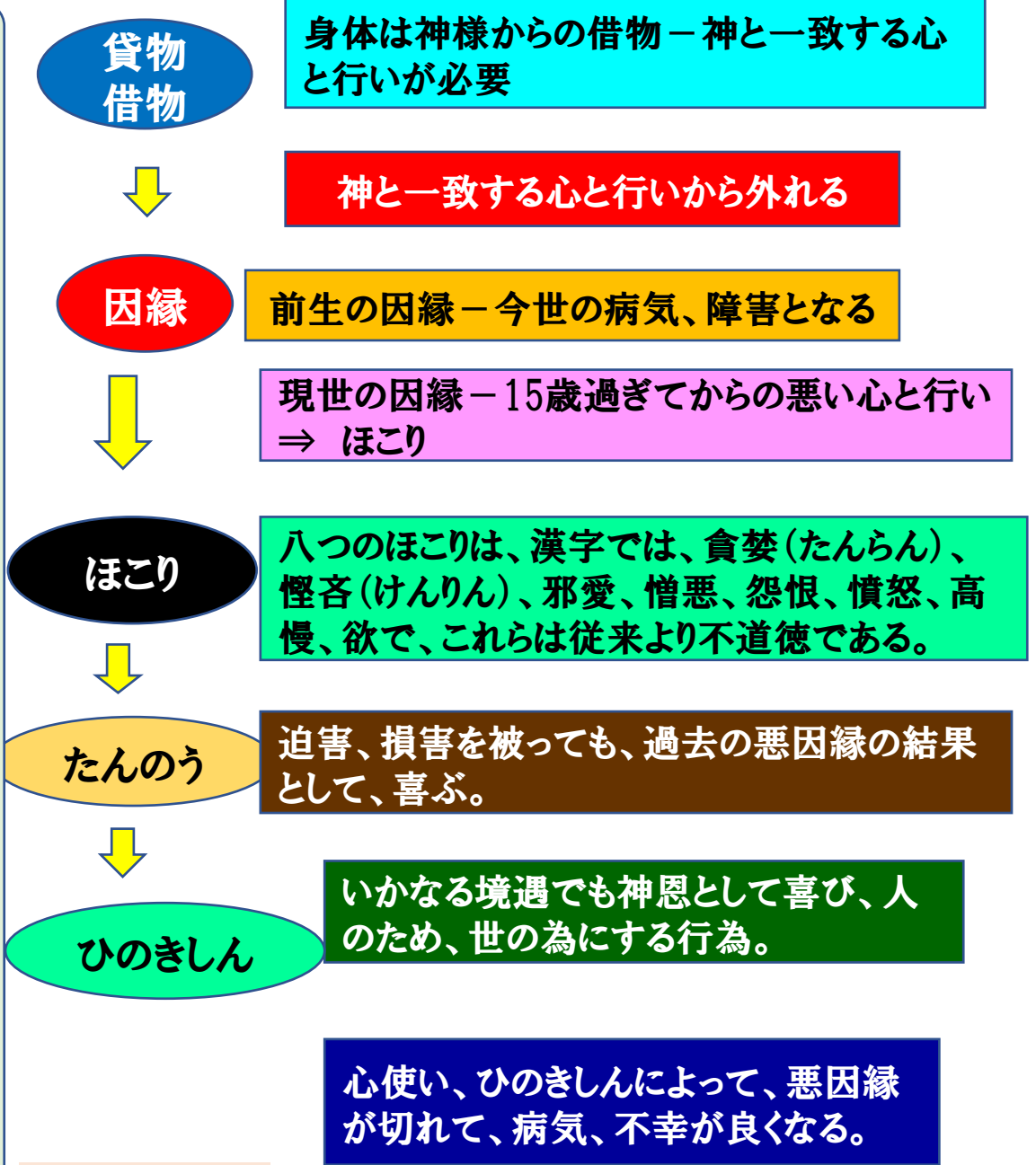


天理で幸之助が回ったであろうルート。【私の行き先 考え方】の記述に即す(資料作成・提供：住居別也 天理大学教授)

松下幸之助と天理教の関係に入る前に、大正期以後の天理教教理について説明しておきます。明治29年の秘密訓令以降、政府の方針に沿う形で、「みかぐらうた」解釈や『教典』を作成した教会本部は明治41年に一派独立を果たします。また、明治45年には広池千九郎が書いたとされる『三教会同と天理教』が出版され、現在の天理教教理の原型ができています。神宮皇學館の教授であった広池千九郎が生み出した「天理教教理」は、「おふでさき」「みかぐらうた」「おさしづ」の言葉に基づいて構成されています。ただ、教祖の言葉の意味そのままではなく、かなり変えて「教理」を作り出しました。例えば、明治時代に布教した板倉槌三郎は、「お助けをして因縁を切って貰ふとか講社を拵らへるとかいふ様な考えは毛頭もない。(中略)『因縁』といふことも教祖の時分には仰しやらなかった」ということを大正になってから話しています。

教理の前半、「貸物借物」「因縁」「ほこり」は、なぜ現在の境遇に自分が置かれているかの説明であり、次の「たんのう」「ひのきしん」がこれからの生き方を教えています。『三教会同と天理教』には、「神様が小難を大難に代へて下さったものとして現世の境遇を喜び神の恩寵を感謝して其の日を送る」のが「たんのう」であり、「自分の労力でも金銭でも、之を自分の慾や高慢の為にせずして、人の為、世の為、國の為、又は教会の為人心救済の為とて、清らかな心にて出したものを皆斯くの如く日の寄進と云ふ」とあります。これは「貧しさから抜け出すために彼らは自主的に生活態度を改め、道徳的に振る舞い、努力を続け」(当資料P24.大沢.下から5行目)る通俗道徳なのです。大正6年頃から、天理教内で「朝起き、正直、働き」という言葉が作り出されるのですが、これはまさに通俗道徳を表現した標語です。

この教理は、昭和24年に作られた現在の教典にも引き継がれました。しかし、「因縁」の部分が差別事件を引き起こし、教典が改訂され、「前生因縁」の部分は削除されました。





## 幸之助の天理訪問

『命知と天理』に幸之助の見学ルートが出ています。一日で、本部施設と教育施設をほぼすべて見たことが確認できます。

これはパナソニックホールディングスのHP(当資料P23)にも出ています。

### 幸之助氏の天理訪問ルート

#### 午前の見学(詳細は第3章)

- ① 駅から神殿への参道と周辺の教団施設
- ② 教会本部の境内敷地
- ③ 神殿(現在の北礼拝場)
- ④ 教祖殿の建築風景
- ⑤ お墓地(教祖墓地と信者墓地)

#### 午後の見学(詳細は第5章)

- ⑥ 旧制天理中学校
- ⑦ 天理外国語学校、天理図書館
- ⑧ 天理教校
- ⑨ 製材所

## おぢば案内図

昭和7年

この地図は、昭和7年発行の「おぢば案内図」(天理図書館蔵)を参考に製作したものです。同図には「昭和七年十一月十日現在」とあり、幸之助氏が見た風景を追ううえで、刻々と変わるおぢばを記録した貴重な資料といえる。

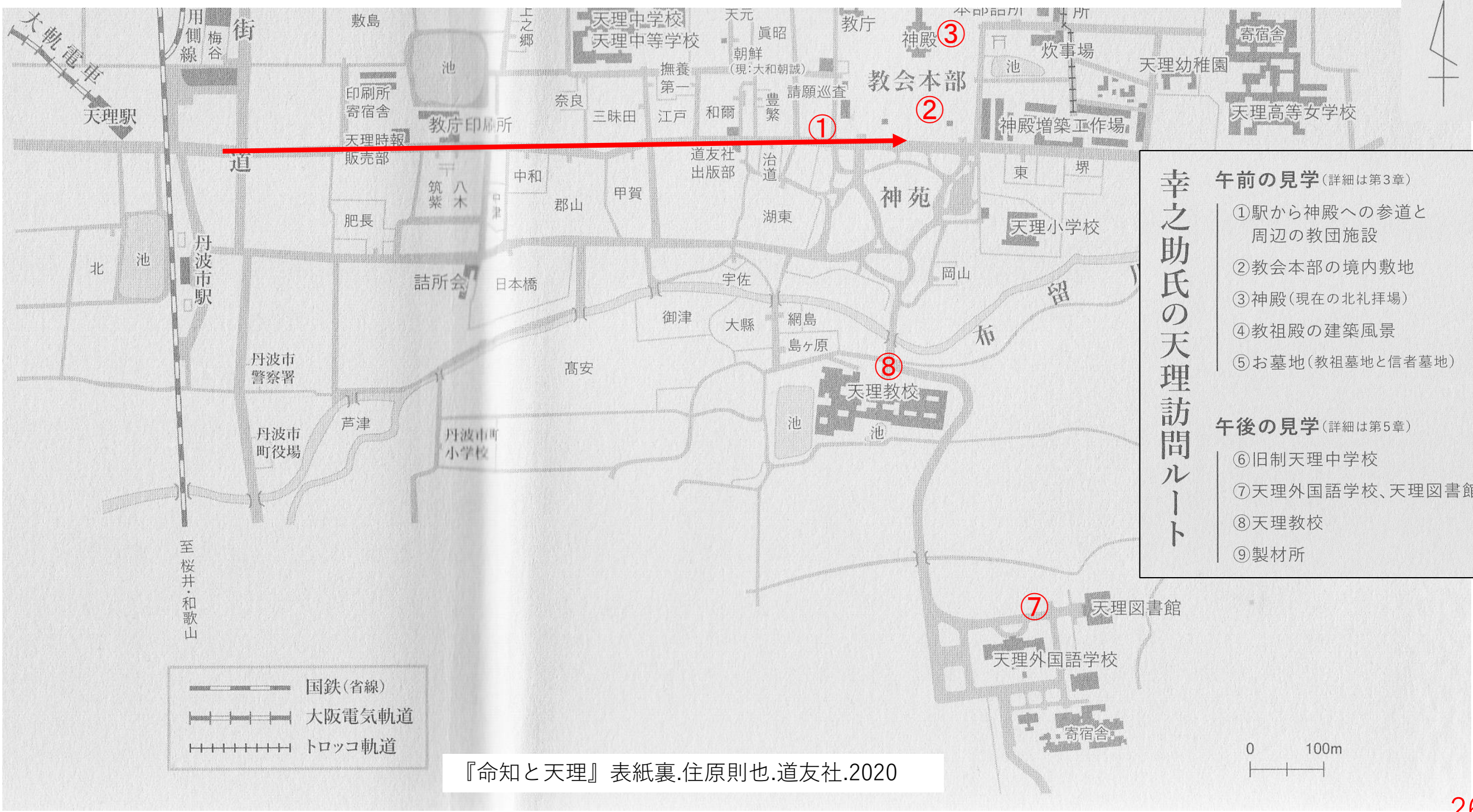
南北に走るのは国鉄(現在のJR、当時は省線と呼ばれた)桜井線。丹波市駅の北側に天理教専用側線があり、団参や献木の受け入れに使われた。材木置場、製材所が併設され、ここからトロッコ用の軌道が東へと敷かれ、鉋工場、工作場へと続いている。

地図中、主に信者詰所は太字(ゴシック体)で記した。教会本部の関連施設は建物全体に網をかけた。

なお、本文中に、この地図の一部を拡大し、掲載している箇所がある。



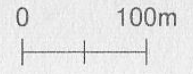
『命知と天理』表紙裏。  
住原則也.道友社.2020



- ### 幸之助氏の天理訪問ルート
- 午前の見学** (詳細は第3章)
- ① 駅から神殿への参道と周辺の教団施設
  - ② 教会本部の境内敷地
  - ③ 神殿(現在の北礼拝場)
  - ④ 教祖殿の建築風景
  - ⑤ お墓地(教祖墓地と信者墓地)
- 午後の見学** (詳細は第5章)
- ⑥ 旧制天理中学校
  - ⑦ 天理外国語学校、天理図書館
  - ⑧ 天理教校
  - ⑨ 製材所

国鉄(省線)
   
 大阪電気軌道
   
 トロッキ軌道

『命知と天理』表紙裏.住原則也.道友社.2020



時あたかも、ある宗教を見学視察した。そしてその繁栄、その盛大ぶりに痛く心を打たれた。そうしてその宗教の使命というものは奈辺にあるかということを考えてみた。そういうことも一つの動機となって、われら生産人にはその崇高さにおいて、宗教に対し何らの逕庭(※けいてい—へだたり)もない大いなる使命の存することを知ったのである。／ すなわち実業人の使命というものは貧乏の克服である。社会全体を貧より救ってこれを富ましめるにある。商売や生産は、その商店や製作所を繁栄せしめるにあらずして、その働き、活動によって社会を富ましめるところにその目的がある。社会が富み栄えて行く原動力としてその商店、その製作所の働き、活動を必要とするのである。その意味においてのみ、その商店なり、その製作所が盛大となり繁栄して行くことが許されるのである。商店なり製作所の繁栄ということはどこまでも第二義的である。しからば実業人の使命たる貧乏を克服し、富を増大するということは何によってなすべきか。これはいうまでもなく物資の生産に次ぐ生産をもってこれをなすことができるのである。いかなる社会状態の変化があっても、実業人の使命たる生産に次ぐ生産を寸刻も忽(ゆるが)せにせず、これを増進せしめて行くところに産業人の真の使命があるのである。／ 従って今日の各セメント会社のごとき、設備がありながら操短に次ぐ操短を以て市価を維持して行くという経営は、それが一時的な市場情勢によるとは言え、産業人の使命から言えば、これに反したやり方だと強く考えなくてはならぬのである。／ あの水道の水は加工され価あるものである。今日、価あるものを盗めば咎を受けるのが常識である。しかるに道端にある水道の水の栓を捻って、あまりの暑さに行人が喉を潤さんとて存分にこれを盗み飲んだとしても、その無作法さをこそ咎める場合はあっても、水そのものについての咎め立てはないのである。これはなぜであるか。それはその価があまりに安いからである。何か故に価が安いか、それはその生産量があまりに豊富であるからである。いわゆる無尽蔵に等しいがためである。ここだ、われわれ、実業人、生産人の狙い所たる真の使命は。すべての物資を水のごとく無尽蔵たらしめよう。水道の水のごとく価を廉ならしめよう。ここにきて始めて貧は征服される。／ 宗教道德の精神的な安定と、物資の無尽蔵な供給とが相俟って、始めて人生の幸福が安定する。ここに実業人の真の使命がある。自分が我が松下電器の真使命として感得したのはこの点である。ここに諸君にお話する松下電器の真の使命は、生産に次ぐ生産により、物資をして無尽蔵たらしめ、もって楽土の建設を本旨とするのである。／ しからばいかにしてこの使命を達成するか。それは左の方法と順序によるのである。／ すなわち今日以後250年をもって使命到達期間と定める。そしてその250年間を十節に分割するのである。第一節の25年間を更に三期に分ける。しかして第一期の10年間は専らこれを建設時代とする。次の第二期10年間は建設を続けつつ専ら活動する活動時代である。そして最後の5年間は建設と活動を続けつつ、これらの施設をもって主として世間に貢献する貢献時代とするのである。以上三期、第一節25年間はすなわち今日出席せるわれわれの活動する活動期間である。しかして二節以後はわれわれの次代の人たちが、同じ方途と方針とをもってこれを繰返すのである。以下第三節以後もまた同じように次代々々の人たちが繰返し繰返して、十回250年に達して、世を物資に充ち満ちた、いわゆる富み栄えた楽土たらしめんとするものである。(『松下幸之助—私の行き方考え方』P258. 松下幸之助. 日本図書センター. 1997 (初版は1962))

幸之助の250年という期間を決めて、それをさらに分けて10年ごとの目標を設定する点は、天理教の

10年ごとに年祭を行い、その年祭に合わせて目標を定めるやり方に似ています。『命知と天理』はそのような天理教との類似点を表にまとめています。これは戦前における天理教の組織運営は、教理面は別として、「経営」として優れたものを持っていたということでしょうか。ただ、幸之助の水道哲学、物を無尽蔵に生産して貧困をなくすという考えは、そのためのエネルギー消費に限界があることや、分配の問題もあって無理でしょう。それは生産の伸びは暮らしやすい社会を生むのかという問題をはらんでいます。

「みかぐらうた」の「こえをおかず」は明治30年代以降、たとえと解釈されてきました。しかし、「肥を置かない」農業の方が、農民の生活本位に考えれば、幸せだったのではないかという気がします。

### 指摘されてこなかったこと（「類似」の諸点）

昭和7年5月5日（「第1回創業記念日」）以降、松下電器は拠点を大阪市内から市外にある現在の門真市へ移し、会社も事業規模も急拡大していくが、その過程において、近代の日本企業一般の歴史上でも珍しいほどの、さまざまな経営上の「新機軸」（と幸之助氏が呼ぶ仕組みや社内慣習など）を次々に導入している。それらは奇遇にも、松下電器と天理教との間にある、かなりの数の「類似」の諸点と見なすこともできるものだが、ほとんど全く指摘されてこなかった点でもある。それら類似点は、時系列に並べれば次項のようになる。また、類似しながらも「相違」もあり、それも含めている。天理教を知らない読者にとれば、まさに知らないことばかりであろう。 —中略—

#### 「類似」の諸点の項目一覧

- 1、昭和7年5月、松下電器の「（社会の）**貧乏の克服**を産業人の使命とすること」と、教祖中山みきの「**谷底せりあげ**」「一に百姓たすけたい」との類似と相違
- 2、昭和7年5月、松下電器の「**目標達成に期間を区切ること**」と、天理教の10年ごとの「**教祖年祭**」活動、期間を区切ったの祈願、などとの類似と相違
- 3、昭和7年6月に復刊した松下電器の『**歩一会会誌**』（月刊）および昭和9年12月から『**松下電器所内新聞**』の発行と、天理教の月刊誌『**みちのとも**』（明治24年創刊）および週刊紙『**天理時報**』（昭和5年創刊）との類似
- 4、昭和8年・10年の松下電器の「**事業部制・分社制**」（独立採算制）と、天理教の組織：**本部—大教会—分教会**（独立採算制）との類似
- 5、昭和8年5月からの松下電器内での「**朝会・夕会**」の開始と、天理教神殿での「**朝勤・夕勤**」との類似
- 6、昭和9年・11年の松下電器の「**社内教育機関の設置**」と、天理教による教育機関「**天理教校**」「（旧制）**天理中学校**」「**天理外国語学校**」などとの類似
- 7、昭和13年の高野山における「**松下電器墓所の設立**」と、**教祖墓地（豊田山墓地）**との類似
- 8、昭和15年「**松下病院の設立**」と、天理教による病院「**天理よろづ相談所**」（昭和12年、開設認可を得る）との類似
- 9、戦後の展開における、松下幸之助氏の考え方と天理教教祖の教えに見る類似と相違（『命知と天理』P31. 住原則也. 道友社. 2020）

増産に励む日本農業 — 明治維新以後の日本の農業生産  
— 昭和5年に反収は明治初期に比してほぼ倍 —

表1 農業諸指標の変化

昭和5年の反収は、明治10年の倍になっています。	1877年	1890年	1900年	1910年	1920年	1930年
	M10	M23	M33	M43	T9	S5
①耕地面積(百町)	46,406	48,769	51,401	55,229	59,204	59,319
② 田	27,013	27,937	28,392	29,391	30,657	31,963
③ 畑	19,393	20,832	23,008	25,838	28,547	27,355
④農家戸数(千戸)	5,508	5,451	5,492	5,518	5,546	5,608
⑤農業就業人口(千人)	14,773	14,298	14,191	14,017	13,939	13,911
⑥農家1戸当農業就業者数(人) ⑤/④	2.68	2.62	2.58	2.54	2.51	2.48
⑦農家1戸当耕地面積(反) ①/④	8.43	8.95	9.36	10.01	10.68	10.58
⑧農業就業者1人当耕地面積(反) ①/⑤	3.14	3.41	3.62	3.94	4.25	4.26
⑨農業就業者1人当田地面積(反) ②/⑤	1.83	1.95	2.00	2.10	2.20	2.30
⑩米穀生産量(千石)	32,899	39,134	41,701	50,321	57,802	62,182
⑪田地1反当米穀収量(石) ⑩/②	1.22	1.40	1.47	1.71	1.89	1.95
⑫農家1戸当米穀収量(石) ⑩/④	5.97	7.18	7.59	9.12	10.42	11.09
⑬農業就業者1人当米穀収量(石) ⑩/⑤	2.23	2.74	2.94	3.59	4.15	4.47
⑭人口(千人)	35,639	39,789	44,140	49,571	56,035	64,498
⑮1人当年間米穀消費量(石)	0.69	0.84	0.80	0.91	0.99	0.98
⑯自給率(%)	101	101	95	95	92	86

出典)梅村又次他編『長期経済統計9 農林業』東洋経済新報社, 1966年, 篠原三代平他編『長期経済統計6 個人消費支出』東洋経済新報社, 1967年, 梅村又次他編『長期経済統計2 労働力』東洋経済新報社, 1988年.

注1)それぞれの年を中央年とする7カ年移動平均. 田, 畑は内数.

注2)1人当年間米穀消費量は『長期経済統計6 個人消費支出』の「飯米用」から算出.

2021.05P22

土地生産性(反収)の伸びは肥料投入の成果です。しかし、それは国力の強化にはなっても、農民の生活改善にはつながらなかったと思われます。それが「肥置かず」につながるのです。

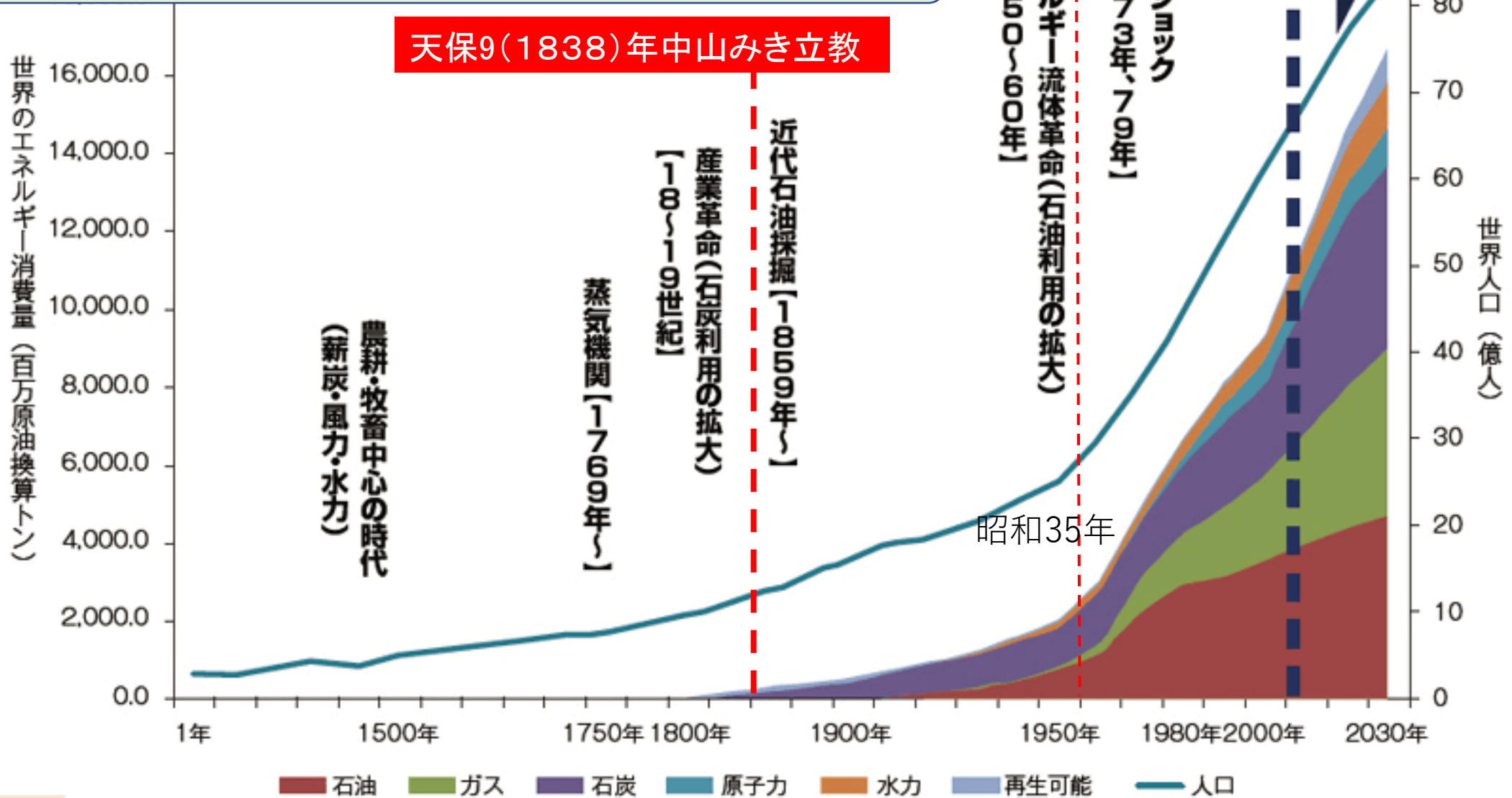
農業国が工業化を進める場合、農業が工業化を支えるためには、工業化の初期段階以上に、その後の過程でも農業の労働生産性が向上することがその基礎的条件となる。近代日本の農業生産は、工業化に対し、どのように展開したであろうか。最初に、明治前期から昭和初期までのわが国農業の展開状況をみておきたい(表1)。

表1の指標で、もっとも安定的なのが農家戸数である。数万戸程度の幅の増減はあったが、ほぼ550万戸を維持している。耕地面積は、順調に伸びており、明治前期の460万町から昭和初期の590万町まで、三割近く増加している。したがって、農家1戸当耕地面積は比較的大きく伸びている。また、農業就業人口は、大きな減少ではないが、徐々に減少していたから、農家1戸当農業就業者数はやや減少し、逆に農業就業者1人当耕地面積はやや増加していた。

主食であった米穀の生産量をみると、明治前期の3300万石から昭和初期の6200万石まで、倍近く増加している。農業労働生産性(⑬)は、明治前期の2.23石から昭和初期の4.47石と倍増している。農業労働生産性は、土地労働比率(⑨)と土地生産性(⑪、反収)の積であるから、農業労働生産性の伸びを規定するのは、土地労働比率と土地生産性の動向である。明治前期から昭和初期までの増加率をみると、土地労働比率26%、土地生産性60%であったから、土地生産性の伸びが農業労働生産性の伸びに大きく寄与していたことが分かる。つまり、主に**土地生産性の伸び**を通して労働生産性を伸ばしていたところに、近代日本の特徴があった。(「地主制の成立と農村社会」坂根嘉弘『岩波講座日本歴史』第16巻. 岩波書店. 2014. P225)

江戸時代中頃から日本のエネルギー量は増加していきます。また、資本主義的な経済システムは、経済格差を生み出していきます。人口の飛躍的な増加を支えているのは、食糧の増産で、それは多量の肥料の投入に支えられています。しかし、このような状況はいつまで続けられるのでしょうか。

生産増大には限りがある



現代社会のシステムである資本主義に対する最新の研究は、「成長は生物界に破壊的な影響を及ぼす」としています。成長—増産のシステムが日本で生まれたのは江戸時代、金肥投入による大和の綿作が最初ではないでしょうか。それ以降、日本も資本主義的経済システムが入り、明治維新で政府公認のシステムになり、大正、昭和から今につながっています。

最後に「修養」「心田」の話に戻せば、庶民が幸せになる道は、「心田開発」ではないところにあるような気がします。それは教祖の教えの中にあるのかもしれませんが。そうであれば、教祖の教えが完全に復元されたとき、天理教の教育機関の名前もそれにふさわしいものに変更する必要がありそうです。

**永遠に続く経済成長という資本主義の幻想** / わたしたちは資本主義という言葉に敏感だ。資本主義については誰もが強い感情を抱いていて、好悪のどちらであれ、もっともな理由がある。しかし資本主義をどう思っていたとしても、それがどのようなもので、どのように機能するかをはっきり見定めることが重要だ。 / 資本主義は「市場」や「取引」といった馴染みのある平凡な言葉で説明されがちだが、その説明は正確ではない。市場と取引は資本主義が始まる数千年前から存在し、それらに罪はない。資本主義が歴史上の他の経済システムの大半と異なるのは、それが絶え間ない拡大、すなわち「成長」の要求を中心として組織されているからだ。産業の生産と消費は増え続け、国内総生産（GDP）という単位で計測される。成長は資本主義の最優先命令だ。資本主義における生産の増大が目的とするのは、人間のニーズを満たすことでも、社会を向上させることでもなく、利益を引き出し蓄積することだ。それが何より重要な目的なのだ。このシステムは一種の全体主義的論理の上に成りなっている。その論理とは、すべての産業、すべての部門、すべての国の経済は、終着点がないまま常に成長し続けなければならない、というものだ。 / この意味を理解するのは難しいかもしれない。「成長」という概念はとても自然に思えるので、わたしたちは当たり前と見なしがちだ。成長は自然な現象であり、あらゆる生物は成長する。しかし自然界の成長には限界があり、生物はあるところまで成長すると、健全な均衡状態を維持する。成長が止まらないのは、言うなればコーディング・エラーで、がんなどで起きる。細胞が成長そのものを目的として複製し続け、やがて死をもたらすのだ。 / 資本主義のもとでは、世界のGDPは毎年少なくとも2%から3%成長し続けなければならない。大企業が総収益を維持するには、どうしてもそれだけの成長が必要とされる。2%から3%の成長はわずかに思えるかもしれないが、これが指数関数的な成長で、グラフは急カーブを描いて上昇することを忘れてはならない。3%の成長は、世界経済が23年ごとに倍の規模になることを意味し、倍増した経済は再び倍になり、それが何度も繰り返される。もしGDPがどこからともなく生まれるのであれば問題はない。だが、そうではない。GDPは、エネルギーおよび資源の消費と連動しており、この連動は資本主義の歴史を通じて続いてきた。両者がきっちり連動しているわけではないが、生産量が増えるにつれて、世界経済は年々より多くのエネルギーと資源を消費し、大量の廃棄物を生み出してきた。現在では、科学者が「プラネタリー・バウンダリー」〔地球の限界—地球上で人間が安全に生存できる限界〕として定量化した限界を大幅に超え、生物界に破壊的な影響を及ぼしている。（『資本主義の次に来る世界』P27. ジェイソン・ヒッケル. 東洋経済新報社. 2023）